

# 第5章

## 参加者の声

## 第5章 参加者の声

「自分にちゃんと向き合えるようになるまで」

第60回日米学生会議実行委員

呉 宣咏

「なぜ韓国人なのに日米学生会議に参加しようと思ったの？」

第59回日米学生会議にデリゲートとして参加した時から実行委員として活動した第60回日米学生会議まで約2年の間、一番多い頻度で聞かれた質問である。聞かれた度に私は日本に勉強している韓国人として日本側とアメリカ側の間にたって客観的な立場から物を見てみたい、アメリカとの関係において韓国と日本との違いを知りたいと答えてきた。しかし、口からはそう答えていたが、心の中でははっきりとしてない何かをずっと探していた。なぜ、私はここにいるのか。意外と答えは簡単だった。それは、「日米学生会議」に参加しなかったからだ。「日本人アメリカ人学生会議」ではない「日米の学生会議」に参加するのが目的であった。日本の大学に在学している私は韓国からみても留学生であり、日本からみても同じ大学の学生なのに留学生というタイトルが先に出てくる。私はそこで日本に来る時は全然予想もしていなかったアイデンティティの問題にぶつかってしまった。私はどこにも所属していない浮いている存在であるのか、他人に見られている自分は何だろう、作られている留学生のコミュニティから出てキャンパスの中に入ろうとする努力は結局無駄であるのかなど色々なところで悩んでいた自分だった。悩んでいながらも、留学生が主体になって活動するサークルにの一員として早稲田祭に参加していたある日、閉幕式でのことだった。閉幕式で早稲田祭実行委員長熱いスピーチを聞いていた。実行委員長は動くスペースもなく集まっていたOBを含む早大生に向けて、となりの人と肩を組んで一緒に校歌を歌うことを注文していた。その言葉が終わっていないうちにみんな肩を組み始め、一回もあつたことのない人と肩を組んで歌詞も覚えてない校歌をとっても楽しく歌っていた自分に気づいた。そして、早稲田に対する自分の思いを熱く語っていた委員長の話にみんなと一緒に涙を流した。その瞬間、私はずっと悩んでいた問題の答えを見つけたような気がし

た。それは、自分は間違いなく早稲田大学の学生であり、ただ出身が韓国であるだけだということ。とても簡単に聞こえるかもしれないが、私はこれを心の底から認めて、吸い込むまで時間がかかった。自分が留学生であるということを言い訳にしないで、日本の大学に在学している「学生」としてできることに挑戦してみようと決心したのである。

それと同時に第59回日米学生会議に参加することになった。しかし、日本に生まれてない、日本で育ってないという人は私一人しかいない環境に気が付き、心からちゃんと離して遠く飛ばしたと信じていたジレンマに入ってしまった。それは私を自分を出せない小さな子にしてしまい、無関心につながった。しかし、36人のアメリカ側参加者と一緒に過ごした1ヵ月の間、私はその空間では自分はもう留学生でも、韓国人でもない一人の人間、呉宣咏としていられる場所だということに気付いた。あとはそれが場所による問題ではなく、自分が作っていた心のフェンスだったということまで分かるようになった。私は呉宣咏という名前を持っている一人の人間として生まれ変わったのである。「自分」に気が付き、「自分」として認識しはじめたらその先はアイスリンクの上をスムーズに滑るスケートみたいに進んでいた。「自分」だからこそできることは何があるのか。その自分だからこそできることというのは他人のために使えることなのか。そのクエスチョンマークについて考えていた時に私は次の実行委員の候補になっていた。一秒も悩むことなく、実行委員の選挙に出ている私は本会議で自分に向き合えた経験を同じように次の参加者にも経験して欲しいという気持ちが強かった。参加者が悩む時にも、戸惑う時にも、本会議に絶対みんな一回は経験するんだろう自分の中での混乱とぶつかっている参加者の隣にいつでもあげ、ぶつかっていた問題を自分で解決した時に一緒に喜んであげるという準備はできていた。それが、その時私が考えていた自分だからこそできることであった。その思いがみんなに伝わったおかげなのか、次の実行委員に選ばれた私は誰よりも第60回会議の参加者に早く会いたがっていたため、選考という仕事を担当していた。250人の小論文を夜遅く

からデニーズで採点しながら誕生日を迎えたり、郵送の作業を夜遅くまでやっていて事務所に閉じこめられたり、仕事を期間内に終わらせるために入学以来始めて授業をサボったり、春休みずっと事務所通いで、立命館大学の寮に引きこもって終わらない議論をしたり、最後の週は体が耐えられないようになって日曜のエマージェンシールームでリンゲルの力を借りなければならなくなったり、アメリカ側の実行委員達と会議するために夜中まで起きてチャットしたり、毎週行われたスカイプミーティングを何回も忘れていて一番多く罰金を払ったり、毎月のオリセンでの合宿でパッキングは5分で終わらせるようになり、36人の日本側参加者の名前をちゃんと漢字まで覚えていてパソコンの自動変換プログラムには参加者の名前が一番上に出てきたり、アメリカから戻ってきた時には初めてのジャスク・シンドルームで3年という留學生活の中で一回もなかったホームシックになったりした2年間という時間は私にとっては宝物である。自分に向き合えた第59回に続き、第60回では沢山の人の中で「自分」に出会うことができた。リーダーという全てを把握してみんなを引っ張っていかなければならない位置で、責任というものを学んだし、忍耐というものを身につけることができた。自分はやはり人の中で一番の喜びを感じ、幸せになり、呼吸ができ、生きてると感じると再確認した。そして、次のステップに進める自信もついた。やる気も出た。次の会議がどういった会議になるのかということに興味を持つぐらいの余裕も出来た。つまり、2年という最大限に楽しんでいた日米学生会議の現役を卒業してこれからはOGとして見守りながら応援する準備ができたのである。

第60回日米学生会議実行委員選挙で私は「HERO」を歌っていた。

There's a hero  
If you look inside your heart  
You don't have to be afraid  
Of what you are  
there's an answer  
If you reach into your soul

And the sorrow that you know  
Will melt away

第59回会議で71名のHEROは私に本当のHEROは自分自身であり、それは自分にちゃんと向き合えないと見えてこないということを教えてくれた。私はそのHERO達の前でまた新しい71名のHEROに会いたいと言い、みんなが私に教えてくれたようにその71名にも自分の中に生きているHEROに出会うようにしてあげたいと約束していた。第60回日米学生会議に参加者はどう考えていたか分からないが、私は選挙で歌いきれなかった残りの歌を実行委員になった瞬間から本会議が終わって1ヵ月もたっている今まで歌い続けている。

And then a hero comes along  
With the strength to carry on  
And you cast your fears aside  
And you know you can survive  
So when you feel like hope is gone  
Look inside you and be strong  
And you'll finally see the truth  
That a hero lies in you

It's a long road  
When you face the world alone  
No one reaches out a hand  
For you to hold  
You can find love  
If you search within yourself  
And the emptiness you felt  
Will disappear

And then a hero comes along  
With the strength to carry on  
And you cast your fears aside  
And you know you can survive  
So when you feel like hope is gone  
Look inside you and be strong  
And you'll finally see the truth  
That a hero lies in you

## 第5章 参加者の声

Lord knows  
Dreams are hard to follow  
But don't let anyone  
Tear them away  
Hold on  
There will be tomorrow  
In time  
You'll find the way

And then a hero comes along  
With the strength to carry on  
And you cast your fears aside  
And you know you can survive  
So when you feel like hope is gone  
Look inside you and be strong  
And you'll finally see the truth  
That hero lies in you

### 明石恵美子

8月が終わりまだ蒸し暑さが続く日本へ帰った後、元通りの忙しい生活が始まった。現実突如として襲い掛かり、アメリカで過ごしたひと夏は瞬く間に「思い出」と化してしまった。移動に講演に勉強にと忙しい本会議だったにも関わらず、何故か「思い出」はみな牧歌的で、広大な草原で餞色の黄昏を見ているかのように甘く、そしてもの寂しい。日米学生会議を終えて早2ヶ月が経とうとしている。少しずつ色褪せてゆく「思い出」に浸りながら、果たして私にとっての「日米学生会議」とは何であるのかを考えたいと思う。

現在の政界や経済界を牽引するそうそうたるメンバーであるOB・OGや、「日本代表として」、「ジャパデリとして」という言葉、そして初日の出のように輝かしい光に包まれたその「日米学生会議」という存在は、時に私にとって眩し過ぎることもあった。一私は「日米学生会議」で何を得たのか、何を提供できたのか、何を発信できたのか— 今考えると、以前の私は無意識的にこれらの考えに固執しすぎたのかもしれない。もちろん、会議の中で一定の結論に至り、何らかの実りを得ることは大切である。

しかし、今分かることは、会議は「きっかけ」や「はじまり」でしかないということだ。あるいは、人生という大鍋の中の味に影響を与える「香辛料」の一種でしかないのではないかと思う。そしてそれを料理するのはこれからの自分自身に他ならない。その経験はよく咀嚼し、吸収することで、養分となって体内をめぐりまた自分を強く成長させるのだろう。

「日米学生会議」というと、どうしても「本会議」が活動の中心になるかの様だ。だが私が多くを学んだのは、この本会議はさることながら、事前活動や一見本会議とは関係のない「遊びの時間」だった。事前活動は本会議を充実させ、自分自身の考えの幅を大きく広げた。単なる娯楽のようだった、アメリカでの観光や遊びの時間も、アメリカという国の文化・歴史、人々をより深く知り友情を深める格好の機会であった。私にとっての「日米学生会議」は、「日米学生会議のジャパデリ」となった瞬間から始まった一連の経験なのだ。事前活動、本会議での活動、それらを通じて知り合った人々はもちろんのこと、その経験や人脈から派生される事柄も全て含まれる。その意味で、「日米学生会議」は私の中で永遠に続き、これからの人生に多大な影響を及ぼすだろう。

実に気軽な気持ちで応募し幸運にも合格してしまった「日米学生会議」であった。しかし、この会議の経験から私は、何事にも代え難い多くの宝物を得、表す言葉も見つからないほど濃厚な経験をした。温かいOB・OGの方々、事前活動や会議を通じて出会った魅力的な人々との出会い、そして何よりも、会議のはじめから共に頑張ってきた、理解があり気さくで優秀で、一緒にいて心地の良い日米の友人たちこそが、私が「日米学生会議」で得た最高の宝である。自分の限界を悟り不甲斐なさを感じることもあり、時に羨望や焦燥感などという複雑な感情を抱いたこともある。しかし同時にこの経験は、時に私を激励し、鼓舞し、自信を持たせ、慰め、喜びを与える。私にとっての「日米学生会議」はその歴史と響きのようにスマートで輝かしいものばかりではない。しかし、全てが始まったあの初夏を思い出す時、その経験はいつも、優しい春の光を目いっぱい浴びて成長した新緑が芳しい若竹のような爽やかで健やかなも

のに感じられる。もちろん後悔するところもある。しかし、会議の終了や「ジャパデリ」としての活動は決して終わったわけではないのだ。この夏に経験したことや気づかされた自分の中の欠点や新しさをアウトプットするための時間、出会った人々をよりよく知るための時間、そして築いた絆をより温めるための時間は残りの人生の分だけある。この経験と友情は決して衰えることはなく、私の人生の「香辛料」として未来永劫に刺激と味わいを与え続けてくれると確信している。

### 李 鎮河

日米学生会議その1ヵ月、私たちは何を心得て帰ってきたんだろう。

今まで持っていなかった多様な視覚を持った人に触れ、大地に立ち、対話、熱情、そして謙遜を学ぶことができた。ある集団をこれほど愛するようになったのはきっと初めてだろう。久しぶりに人生の先輩に出会い、参加者の一人一人と友情を築いていきながら、忙しい日常でだんだん薄れていっていた貴重な価値は感動と涙という形で再現された。

若さを満喫しながら一步一步を歴史に足跡を刻む器の大きい友人たちができたのが一番重要な収穫である。ビジネスであれ学問であれ、多く、そしてきれいに盛るためには大きい器が必要であろう。私は多くのものを入れることだけ考えていたのではないだろうか。

日本、そしてアジアをみるアメリカの視点、また東洋哲学に心酔して勉強している人々の動機や問題意識に関して話す機会もあった。個人的には、日本と韓国を始め、アジアの様々な国で不合理だと思われるシステムの問題や社会問題(教育に力を入れすぎて教育に失敗している韓国の中高や、50%を下回る自由民主主義国家日本の選挙率などでみられる矛盾)は、長い歴史で保たれてきた東洋文化の命脈の上に西洋の形式が塗りつぶされたため起こる内面と外面の葛藤から起因すると思っていた。そして結局この問題を解決するためには、内面も形式に従って変化させるしかないと思っていたのも事実である。

しかし、外にいる多くのアメリカ人はそういう問題はどの先進社会でも起きる成長痛であるし、逆に現在欧米が含んでいる問題の解決案をアジアで探している動きに関する話はとても新鮮であった。そして我々の社会が志向すべき方向性について考え直すきっかけになった。

環境フォーラムを準備しながら持続可能性(sustainable)の意味に関して再度考えるようになったのも収穫である。環境だけに限らず、社会に関しても、個々人であっても持続可能かという問題、つまり持続可能な幸福と意味を理解できるかという問題はみんなが自ら問いなおすべき問題であろう。国家の唯一の存在意味が領土拡張になった瞬間滅亡の道を歩み始めたローマ帝国のように、または眩しく強烈な力を発散しては失う超新星よりは、太陽のように長く暖かく光る社会を、皆が目指してほしい。25日間の合宿は言葉どおりにsustainableであった。

### 伊関之雄

第60回日米学生会議。59回会議とは本質的には同じものはずなのだが…やはり、会議の組織内での役割が違くと、必然ではあるが、違う体験をすることができた。実行委員としての立場、日米学生会議全体から見た本会議の外観、参加者への一言で、60回会議の私の「声」としたい。

実行委員とは、いわゆる情報端末である。参加者、講演者、周辺の声、他人の声などの様々な雑音を集積し、分析し、整理するのが役割と考える。主な雑音は、参加者や講演者からなのであるが。そして、毎晩行なう戦略会議にてそれらの貴重な情報を共有して、次の日の戦闘体制に活かす。面と向かって、話し合うこれらの情報から出るのは大概はアメリカ側からが多い。主催側のアメリカ側の実行委員の責任とリーダーシップは、非常に大きい。日本側もできるだけ、日々の企画面以外の参加者情報や講演者情報などの投げかけを通して貢献する形を形成する。しかし、これがまた、言語や議論の慣れなどの面から適応するのが難しい。

さらに、これまでの1年間はインターネットを通じた文字媒体でのコミュニケーションのためにまだ

## 第5章 参加者の声

情報などは把握することができた。しかし、本会議からは議事録などもなく、毎日毎日の口から発信される無信号の情報なのである。

59回会議の報告書には、歴代の日米学生会議参加者と我々が未だに持っている、未だに共通した日米間のコミュニケーションの難しさに関して記した。今回、感じたのが、参加者のみならずたった8人の実行委員内でもそのような現象が生じてしまうことである。

基本的に、私の時間の多くは、これらのミスコミュニケーションを埋めるために費やされた。口数が少ない日本側の主張を出来る限り、率直に個人攻撃を仕掛けてアメリカ側に送り続けたのである。個人攻撃のため大抵これはうまくいく。同時に、アメリカ側が保有している文句やら問題意識も聞き取り、実行委員会内で原子力爆弾が投下されないように努めるのである。

去年から生じているアメリカからの伝染病であるサブプライム問題が日本や世界へ影響している。CDSやMBSといった債券などの証券が世界を短時間の間に伝染するも、「日米学生会議」という名前の伝染力ははるかに遅い。60年以上の歴史がある日米学生会議も、経済状況に影響され、様々な山や谷底を味わっている。ポートランドでは歴代日米学生会議参加者の方々の同窓会が開催された。60回を再考し、今後の発展を行なう起点がそろそろ来ていることが、現在の金融危機と共に日米学生会議に関係している方々のトップニュースとなっている。25回日米学生会議が大改革を行ない、会議全体の変更やコンセプトを変えたのと同様に、世の中が求める会議への需要(要求)と合わせた我々の会議も柔軟な姿勢での「再考」と「新たな潮流へ」移動していかねばならないのである。実行委員の一人として、このリユニオンの意義、価値観はここにあったのではないかと感じている。

最後に、60回会議に参加して下さった皆様に一言言いたいと思います。めでたく参加者となったみなさん、伊部事務局長が述べていたように、「参加できたのは運」かもしれない。だけど、その「運」で勝ち取った経験は非常に大きいと思う。これからも

それを活かしてほしい。そして、本会議中の色々な変更があっても辛抱強く、寛容な心を持っているみんなは必ずやビックになると感じている。

参加できなかった方々、現在様々な機会が世の中に存在している。それを本会議に手を出したように、なんでも手を出してほしい。

### 居鶴有未恵

#### 1. 参加動機「受容から発信へ」

私が日米学生会議に応募したのは、大学院での生活が毎日慌しく、ただ一方通行に過ぎ去っていくかのような焦りを感じていたからである。また、政治・行政を専門に学ぶ中で、日本の政策は他国(特にアメリカ)の例から選択的に決定する傾向があるように感じ、日本の政策や背景にある価値観、文化を発信する機会を得たいと考えていたことも動機となった。その根底には、グローバル化の現代においても日本固有の価値観や文化を見失いたくないという思いがあった。

私は、時間や情報に追われ、選択肢の中で決定する受身な自分を脱却し、自分の価値観で意見を主張し、相手と刺激し合える主体的な機会を求めていた。そして将来を見据え、自分や自国をきちんと理解し相手と向き合える軸のある人になり、日本を発信したいと考えていた。

#### 2. 事前活動と本会議「Face to faceの大切さ」

約3ヵ月間事前活動を行い、分科会では議論の土台形成をし、駐日米軍基地訪問や留学生とのディスカッションなどを通じて改めて自国を知り、また日米の違いを感じると共に、自分の先入観にも気付くことができた。

そして心の準備は十分に、本会議を迎えた。

分科会は「伝統と現代社会」に所属した。日本のみのテーマであれば江戸時代以降生まれた伝統文化等の変遷といった内容が浮かぶが、アメリカの学生からは議論の最初で「アメリカは日本に比べ歴史が浅く、伝統と現代といっても世代間のジェネレーションギャップでしかイメージできない。」との意見があげられ、事前の想定は通用しなくなった。しかし、これこそ直接意見を交わすことの醍醐味なのだとい

くわくし、お互いの共通認識を築くところから話し合いは始まった。

生活を共にする中でも、生活様式、考え方、スピーチの仕方などに日米の学生間で差異が見られ、時には反発を感じながらも全て興味深く、互いに指摘しあって意識する中で学びあうことができた。むやみに批判や拒絶するのではなく、自分のスタイルを説明した上で相手を受け入れるというやり取りは、コミュニケーションの中の当然の手法であるようで、相手を直接目の前にしないとできないものである。

次第に打ち解けてから最も盛り上がり、国の差を感じなかったテーマは、「恋愛」についてであった。「恋愛」がテーマとなると、普段英語に苦手意識のあった私もすらすらと言葉が出てきたのが不思議である。環境や文化といった国家間で話題になる種のテーマ以外にも、価値観を共有できる興味深い話は毎日たくさんあふれ出てきた。

### 3. まとめ「相互理解」

参加後に、このありふれた表現が実感として得られるようになったことが大きな成果であった。相互理解は実際に顔を合わせることで生まれるものである。科学が進化し人工的な社会で生活する私たちだからこそ、一人一人が直接向き合っ心を通わすことが重要だと体感した。

参加前には、不安やプレッシャーを感じ、またたった1ヵ月間生活を共にするだけでは密な関係は築けないだろうという勝手な思いもあり構えていた私も、気が付けば、メンバーに強い絆を感じ、毎日話したい話題があふれ出てきて寝る間も惜しむ程に会議に夢中になっていた。この感覚は、今まで様々な海外プログラムに参加しても味わえなかったものである。日米学生会議に開催当初から現在まで続いている伝統があり、参加者に日米の架け橋となる責任や自覚があるから連帯感が生まれるのであり、本音で意見をぶつけあう中で壁にぶつかったり互いに対立する人間臭い場面があるからこそ真の友情が育まれるのだと思う。分科会やフォーラムで熱い議論に刺激を受けたことだけではなく、会話が弾んで明け方まで話し込んだことなどは、人は国や年齢に関係なく通じ合えることを実感できる貴重な経験となっ

た。グローバル化という時代の利点を活かして、文化や言葉の壁を越えて個人間から交流を図ることこそ、社会を動かす原動力になると確信した。

以下に、印象的な一文を引用したい。

「現在の世界の情勢は混沌とした様相を呈している。…国内に目を向けても不安と焦燥という形容が相応しい社会になりつつある今日、これら現象は人間が巡ってきた必然の結果であり、私たち人間が先ず変わらなければ社会(世界)は変わらないことを示している兆しである。」(「日米学生会議70周年記念に寄せて」、第1回参加者中山公威氏)

### 伊藤昂介

第60回日米学生会議お疲れ様でした。当初、参加を決めた時は正直不安もありました。というのも、1ヵ月間自分の「日常」からかけ離れて、本当に大丈夫なのか。有意義に過ごせるのか。そんな不安が頭の片隅に常にあったからです。しかしそれも杞憂に過ぎませんでした。それもすべては国際的な視野を持った、尊敬できる『仲間』に出会えたためです。そんなことを思えるほど、分科会、会議行事、そして何より日常から様々な刺激をもらえました。

私が所属していたCSR（企業の社会的責任）の分科会を通して、本当に尊敬できる親友に会い、様々な関心事に関して議論ができたのは、私の大学生活における最も貴重な経験の一つだと思います。そしてまた、CSR（企業の社会的責任）というまだまだ新しいコンセプトを様々な見識者から学び、優秀な仲間と議論できたのも、これからビジネスパーソンとして社会に出て働く上で、非常に役立つものだと思います。また、分科会の議論を通して、英語を話す時の自分と、日本語の時の自分、まじめな時の自分、ふざけている時の自分、というように、様々な自分のアイデンティティを他者の反応や言動を見て再認識できたと思います。しかしそんな素晴らしいことだらけでもなかったです。非常にモチベーションも高い人材が集まったというのに、結局『社会に対してインパクトを与える』どころか、それ以前の『行動する』というレベルにすら到達できなかったからです。そういう意味では会議中、会議直後は後悔

## 第5章 参加者の声

の念がありました。今でもあのグループで何かやったら楽しく真剣にできたなと心残りはあります。しかしそれはそれでも、CSRの分科会に参加できて本当に良かったと思える程、素晴らしい出会いができて喜ばしく思います。

そしてまたJASCという日常においても、様々な思い出が残っています。日米学生会議ということだけあって、公用語も英語と日本語(ちょっとした韓国語)で言語が入り混じるという非日常的な行為が日常でした。日本側参加者にとってはアメリカが、アメリカ側参加者にとっては日本が異文化のはずですが、私にはJASCという異質な空間が日常となることで、その文化間の壁を乗り越える足場となっていた気がします。またともに、ある課題について議論することによって、様々な視点を得られ、世界に対しての視野を広げることもできたなと思っています。

そんな私の第60回日米学生会議は8月21日をもって終わりました。ですが、“Once a JASCer, always a JASCer”という様に、JASCerとしてのアイデンティティは永遠に残ります。そしてJASCで得たこの絆はビジネス、政治、アカデミアと各々の道に飛び出ても、途切れるものではないと思います。また、各々の道が近い将来または遠い未来、会議中に語りあった夢に向けて走り出すのを切に願っています。そしてそれが国境を越えて交差し、パートナーとして再会できたら尚喜ばしいことだと思います。それでは、第61回日米学生会議の委員や参加者、そして将来のJASCerの皆さま、JASCでかけがえのないひと夏を手に入れてください。

### 今矢涼子

ボストン最終日。各々が最後のJASCメールとパッキングに追われる中、私は、自分が翌日には飛行機で帰国するのだという現実をうまく受け止められずにいた。数ヵ月前に出会ったばかりであるジャパデリヤ、1ヵ月前に初めて会ったアメデリとの毎日の生活。会議の最初は、英語のコミュニケーションに悩み、日本側とアメリカ側に別れてしまっていたこともあった。しかし、いつしか言葉の壁やアイ

デンティティーを超え、お互いの価値観や思考をぶつけあい、時には熱く議論し、共に笑い、泣き、はしゃぎ、尊重し、刺激し合う大切な仲間となっていた。寮のラウンジでみんなが深夜まで戯れ話し、笑い声あふれる光景も、毎晩分科会の準備のために行われた大好きな分科会メンバーとの集まりも、もう、ない。そして何より、帰国すれば、今のこの楽しい空間も、私の目の前にある彼らの温かい笑顔も、いつか思い出となってしまう。そう思うと、寂しさと、このような素晴らしい空間に入れることを嬉しく思う気持ちが同時に込み上げ、涙として私の頬をつたっていった。

10年前に住んでいたポートランドから始まった本会議は、その当時の私が知っていたアメリカとは違ったアメリカを見せてくれた。幼い11歳の私に染み付き、今の私を形成している本質は、ここで経験したのによって培われた。そして10年という歳月が過ぎ、22歳を迎える私に、新たな「自分」を作り出す種が芽生えたのもこの場所となった。就職活動を終えた大学4年生として、自分自身、自分の将来、今日の社会についてそれなりに見つめてきたつもりで挑んだ日米学生会議。結果として、この会議で再度自分の弱さと甘さを認めざるを得ない状況に直面し、自分の視野の狭さを痛感することとなった。しかし、この痛みは、自分の目の前がパッと広く開かれるような、爽快な痛みであった。「人間は壁や辛さを乗り越えたときに、新たな皮が剥けて一歩進める」という言葉を大切にしてきたが、学生最後の夏に、まさかこんなにも大きな皮が剥かれるとは思ってもいなかった。そしてこの剥がれた後のじんとする痛みも、その後強く厚くなる皮膚も、その剥けた跡も、「日米学生会議」として、私の中に大きく、深く、温かく刻まれることとなった。

移民問題、環境問題、エネルギー問題、そして戦争と平和と安全保障問題。今日の日米両国が、そして、もはや日米だけでなく世界中の国々が直面している、重大かつ深刻な問題である。このことから目を反らして今後の国際社会は成り立ち得ない。そして世界の一員である以上、これらの本当の現状を知らずして、あるいは、放置して生きてはいけない。



本会議中にこの問題意識が芽生え、それぞれの問題につき自分なりの考えが生まれただけでなく、自分は来年から、社会人としてその責任を担うのだということを強く認識した。また、私が所属した「法と社会」の分科会では、法と社会という切り口から社会的問題を見つめ、解決案を検討した。たとえ学生であっても、現状への問題意識、意見や解決案を提示し、これらを発信することを通じて、社会的意識を惹起することができれば、本会議および分科会の意義は、この上なく有意義であったといえるだろう。

日米学生会議の本会議はたったの1ヵ月であった。私の人生はそれの何倍とある。この1ヵ月で見て、触れて、聞いて、味わって、感じたもの、習得したものを通じて、これからの私は自分の人生の舵をどのようにきるか。これは全て自分次第であり、私はこの貴重な経験を糧として、自分という人間をもっと磨いていきたい。

JASC中に出会った大切な仲間、彼らと過ごした最高の思い出を、写真と自分の記憶にしっかり収めつつ、学生最後の夏にこのような機会が与えられたことを本当に嬉しく思う。こんなにも知的好奇心をくすぐられ、興奮し、本気になった熱い夏を、どう頑張っても忘れることはできないだろう。

#### 大井あゆみ

私は「人」が好きだ。面白い人に出会うこと、その人たちから刺激を受けたり、何かを返したりすることが人生の意味だと思う。JASCはまさにそんな場所だった。

JASCには二つの目的があると思う。

一点目に、議論やフォーラムなどのイベントを通して、世界の現状や様々な問題について、視野を広げ、自分なりの理解を深めること。分科会の議論は、いつも多様な意見が飛び交い、刺激的だった。様々なフォーラムで、壇上に上がって発表する参加者たちを見ているのは、頼もしく、誇らしかった。領事館で聞いた、日本の移民受け入れに関するスピーチも印象に残っている。考えさせられるきっかけが、そこら中に転がっていた。

二点目に、国境を越えて信頼関係を築き、お互い

を理解し、ひいては世界の平和に貢献すること。これは、JASC設立当初からの理念でもある。結局のところ、有名な教授のスピーチよりも、移動中のバスの中で参加者と交わした会話の方が、記憶に残っている。世界中の人が友達になれば、世の中の多くの問題は解決すると思う。そんな考え方は楽観的すぎるのだろうか。

当初は、限られた時間の中で、この二つの目標をバランスすることが難しく感じられた。学術的な鍛錬だけを迫及するのは、もったいない。ただ楽しむだけでも、もったいない。しかし、徐々に、この二つの目標は対立するのではなく、車輪の両輪であると思うようになってきた。議論を通して、お互いの考えをより理解し、その分野の新たな視点を得ることが出来る。逆に、絆が深まっていく中で、今まで自分は関心の無かった分野にも興味が広がる。

例えば、モンタナでは戦争と平和について考える日があった。戦争で亡くなった方を追悼する公園や Jeannette Rankin Peace Center を訪問した後、軍事博物館を見ていたときのこと。アメリカ側の参加者2人と、ふとしたタイミングで憲法9条について話が及んだ。日系2世でもある Neal は、日本の憲法9条は、ダブルスタンダードなのではないかという。つまり、都合のいいときだけ、憲法9条を持ち出して、負担を回避しようとしているのではないかと。Rebecca は、憲法はアメリカが作ったものなのに、今では日本固有の考えとして根付いているように見えるのが不思議だという。私は、日本なりの peace keeping の方法があるのではないかという考えを、一生懸命説明することになった。結局30分ぐらい、その話題は続いたように思う。もっと説得力を持って自分の考えを伝えられるようになりたいというモチベーションがふつふつと沸いてきた。日本側・アメリカ側というのではなく、信頼する一個人として会話ができることは、面白い。

その後、War and Peace Forum というフォーラムがあった。退役軍人の方、平和運動家、歴史学者と私たち学生で、輪になって討論をする。様々な立場の人が、真摯に思うことを共有できる場は、貴重な機会であった。ここでも、同じように、「いかに

## 第5章 参加者の声

平和を構築するのか」が問題になった。私は、武力抜きで日本固有の平和構築のやり方を擁護したい一方で、現実論として、実際はアメリカの武力に頼っている側面があることに関して、自分の葛藤を吐露した。武力抜きで平和を構築できるというのは、理想論すぎるが、武力ありきの平和構築が様々な問題を引き起こすのも間違いない。「平和のありがたさを一番身にしみてわかっているのは、兵士なのだ」という退役軍人のせりふが印象に残った。

日米学生会議で私がどう変わったのかと問われると、一言で答えるのは難しい。私の将来の進路や性格を大きく変える出来事があったわけではない。でも、一人一人との出会いが私に与えた影響は、決して小さくない。

JASCが終わり、1ヵ月。過去をただ懐かしむだけでなく、自分がその経験をどう活かせるかが問われている。

### 小野 元

ほんのちょっとした仕草がなぜか鮮やかにいくつも脳裏に焼き付いている。今はまだその種類が豊富で、思い出したくない失敗や苦笑いでさえ、ランダムにひょいと浮かんできては、いつでも脳内スライドショーの再生が始まる。これらの具体的な場面が僕のJASCを彩っていて、それをここに書き出さないのは字数制限のこともあるけれど、それを自分の中で大切にしたいからでもある。

帰国後、友達がアップしてくれた写真を見ると、JASC期間中、僕は作り笑いでなく、自分でもちょっと驚くほどよく笑っている。こんなにも笑っていたのは、多くの参加者が自身を外に開いていたからだと思う。新しい人、場所、考えすべてに柔軟。参加者のその姿勢が作用しあって醸し出される雰囲気は、なんともいえず居心地がよかった。その雰囲気の中で、自分ができないと勝手に決め付けていたことに、自然に、ときに強引に巻き込まれていた。話していると、はっとさせられる切り返して、常に睡眠不足気味だった僕の目を覚ましてくれた。

寝る時間を惜しんでも、もっと考えを聞いていたいと思うような人達。参加者以外にも、例えばマイ

ノリティフォーラムで、自分達が調べて発表したことへのフィードバックを20分間もしてくれたような教授や、レセプションで同じテーブルにいた一人一人に対して、JASCへの参加理由にじっくり耳を傾けコメントしてくれるような柔らかな方。彼らの存在は、その人たちに自分の意見を聞かれ、うまく言葉にできなかった時のもどかしさを際立たせる。

僕にとって英語は言葉を滞らせる原因の一つだった。これから、単純に練習が必要だ。それに加え、僕は自分のことを言葉にするのにどこか抵抗があり、いつの間にか黙っていることに慣れていた。気がつくと、適当な言葉をなくしかけていた。伝えたい人達を目の前にして、慌てて考えてみても、もやもやした混沌からまとまりを持っていく段階で、言葉は逃げていく。僕自身の表現は途切れたままだ。結局、どこかで読んだ客観的に見える意見を言ってみたり、細かいところを妙に広げてみる。あるいは、あいまいにぼかして、立場を鮮明にすることから降りる。

僕のような自分を相手にさらさない「聞き役」は、聞き役ではないのではないか。双方向でなければ、コミュニケーションは成り立たない。アイデアがまとまらないままでも全体に投げ出して、その後の議論の展開を楽しむのがアメリカのスタイルで、一方、謙遜と自重が日本文化なのだから仕方ないといったこれまたありきたりの結論に逃げるのは、今の僕は納得できない。

ふと、ここまで書いてきて立ち止まってしまう。自分の経験を卑下することは、傲慢と同じ平面のベクトルに過ぎない。自分の課題を見つけ出し、原因をひとつひとつ潰していくやり方は、合理的で着実だが、客観的に自分の課題を見つけたふりをして、仕方がない。現在の僕に見えるのは、この夏休みの体験のほんの一部。わからないことはそのまま受け止めて、ほんのちょっとしたみんなの仕草のように、脳裏に焼き付けておこう。いつか分からないことが少しでもほぐれてきたら、脳内スライドショーに別の意味が加わるかもしれない。

## 金光慶紘

昨年12月、某学生シンポジウムに参加し、“ミステリアス”な女の子、ナオ(EC)に会う。彼女から、日米学生会議の存在を知る。このナオとの出会いがこの夏を、いや恐らくこれからの人生を変えていくことなんてまだ俺は知らなかった。

5月、2泊3日の春合宿。予想以上のキャラ多数。特に、OBの前での自己紹介で、ラップを披露したコウジは神だった。初日の宿泊は伝説の〇〇〇にて。男10人部屋で初日から早くも「恋愛保障理事会(略：恋保理)」第1回会合を行い、事務総長に就任。そんなバカなことをやっている時間あれば、真剣な議論の時間は人が変わったように、スイッチを切り替えるのがJASCer。分科会の議論はとて白熱した。最終日、初めてのリフレクションでは、早くも数人泣いてしまっていて、俺ももらい泣きするところだった。悲しいからでなく、こんなに多くの、こんなにも尊敬出来る仲間を一度に得たことが、本当にうれしかったから。

所属する環境RTは事前活動を頻繁に行った。東京大学、越智衆議院議員、関西電力、電通、小池百合子元環境相、日本テレビを訪問させていただいた。RT合宿も2度行った。@マサト宅+@ナオ宅。マサト宅では孔子、ナオ宅では毛むくじやらの化け物=アンディーに遭遇。防衛大訪問、米軍横須賀基地訪問等、RT以外の事前活動も非常に有意義だった。

ポートランド、JASC発祥の地、JASCの歴史を振り返る。何十年も前に、自分達と年代の先駆者たちは、ここで何を思い、感じたのだろう。ここでの思い出は、スキット交換。日米両方完成度が高かったけど、やはりMVPはジンハ。サイトリフレクションはジャパデリ、アメデリ別々でジャパデリのリフレクは3時間くらいに及んだ。英語のこと、アメデリとジャパデリとの意識の違いなんかが主な議題だった。結局、リフレクし足りなくて、その後他のジャパデリと数人で遅くまでリフレクの続きをやった。ジャパデリの意識の高さにアメデリは応えてくれるのだろうかという不安がまだあった。

LA。3日は俺の誕生日。みんな本当に祝ってくれてありがとう！誕生日、常に夏休みだから、こんな

大人数に祝ってもらったのは人生初。毎日のようにスーツを着て沢山のイベントを行ったが、最も思い出深いのはそのどれでもなく、アメデリのKarenとジャパデリとアメデリ間の壁について深く議論したこと。そこから彼女ととても親しくなり、アメリカ側の一番の親友になった。

モンタナ。この頃はもうJASCの終わりが見えてくる。毎日をこなすのが、精一杯ながらも、常に終わりを考えてしまう日々。ここでの思い出は、環境フォーラム。パネルディスカッションに参加し、ノーベル賞受賞者らと並んで議論したことは、本当に良い経験になった。フォーラム後のレセプションディナー会場の隅で、Karenに「Yoshiと一緒にAECをやりたい！二人でJASCを盛り上げていこう！」って手を強く握られて、口説かれたことが忘れられない。周りで見てた人は、俺が告白されてるのかと勘違いしたみたいだけど(笑)

ボストン。予想外の事態でアメデリの到着が遅れ、ジャパデリだけで2日間を過ごし、感じたことは、アメデリがいてこそJASCだってこと。彼らは、もう欠くことの出来ない存在になっていた。ファイナルフォーラムの準備に追われて、みんなと話す機会もどんどん減って行って、何だか寂しかった。最後の別れのときに、家族と別れるのと、同じ気持ち。そう、俺みんなのことデッカイ家族みたいに感じてたんだ。

今、カナダで留学中の自分は、アメデリにもジャパデリにも会う機会が減多にない。ここで、忙しい毎を送りつつも、いつも思い出すのは、みんなの笑い声、笑顔、そしてナオのENVIRONMENT～！朝起きると、誰かが「Yoshi!」って声かけてくれるような気がして、でも誰もいなくて。自分がJASCで得た一番大切なモノ、それはアカデミックなものや経験ではなく、やはり温かい仲間、JASCに参加しなければ、生涯かけても得ることの出来なかっただろう仲間。そんな彼らとこれからも、共に歩いていきたい。そして、いつか皆で、日米を、世界を変えてみたい。

## 第5章 参加者の声

### 後藤昌也

まず始めにJASCに感謝したい。JASCのおかげで、日本には叶わないかけがえのない経験ができた。単にアメリカの文化を経験するだけでなく、日米で心腹の友ができ、国際的な視野と行動力を身につけることができた。

JASCには良い点が数多くあると思うが、中でも積極的に経験することを歓迎する空気があることが特に素晴らしいと私は思う。その空気の源は、学生が主導で運営しているということと、参加者全体で私たちは学生で勉強をする身なのだから積極的に行動すべきだという共通認識から生まれていた。そして、その空気の中で多くの参加者が積極的に行動し、質問を投げかけ、リーダーシップをとっていた。JASCにこのような自主性を育む環境があることが素晴らしいと思う。そして、この環境が将来リーダーシップを持って世界を変えていく人を生んでいくのだと思う。これから先、国際的なリーダーの輩出が求められている日本のためにも、JASCには末長く続いてほしいと思う。

準備段階について述べると、アメリカに行く前にできる限り準備をしようモチベーションが高まり、新たに行動がしたことは有意義であったと思う。私は、もっとイベントに参加できたなら良かったし、時間が許せば自ら企画を立てられれば良かったとも思う。JASCの準備期間は適度にあり、それが確かに本会議に繋がっていた。

ポートランドサイトでは、ディスカッションリーダーという初めての経験をした。パートナーが期待を良い意味で裏切ってくれた。アメリカ人はディスカッションに慣れているようで、随分助けてもらったことを覚えている。このサイトで議論に対して自信を持つことができた。また進行役をすると視野が広がるので、ディスカッションリーダーの経験はできれば皆がしたほうが良いと感じている。

ロサンゼルスサイトでは、JASC全体を通して言えたことだが、生活環境が素晴らしかった。食住が充実することで、毎日のストレスを解消することができ、モチベーションが高く保たれた。影ながらJASCの活動を支えている部分だと思う。今後も、

この環境を保ってほしい。また、分科会では、このころから議論に慣れてきた。ただ、議論の大枠は理解したが、細かいところをなかなか理解するのは難しさを感じていた。細かいところで議論を止めて質問するのは難しく、議論の時間に余裕がさほどない使いづらかった。やはり時間は多ければ多いほど良いと感じる。

モンタナサイトでは、アメリカを肌で感じ取ることができた。アメリカの広さに驚くとともに、ホームステイをすることで、アメリカの人の生活を垣間見ることができた。アメリカの文化を体感するという点で充実したサイトであった。ホームステイは今後もぜひ続けてもらいたいと思う。また、ここでは、メンバーと話をする時間が多かったこともあり、踏み込んだ話をするのができて良かった。例えば、他の分科会の話聞いて、お互いに意見を交換することができた。

ボストンサイトは、第60回JASCの終わりを告げる場所であり、感慨深いサイトであった。このサイトで良かったのは、個人的なことだが、ハーバード大学に行くことができ、大学院に行くモチベーションが上がったことだ。大学院生との交流もあり、モチベーションが上がるとともに、将来のキャリアプランに一石を投じてくれた。そしてファイナルフォーラムでは、あのようなアカデミックな場所を使わせていただいたことで、モチベーションが高まり充実した発表をすることができたと思う。

最後に、JASCを振り返って、実行委員やOB、大学、多くのスポンサーの協力あつてのJASCであることを実感しています。多くの貴重な経験をさせていただいたこと感謝しています。ありがとうございました。

### 坂本朋美

帰国後2週間以上が経過し、すっかり日常を取り戻した今、改めて私にとってJASCとは何だったのかを考えている。間違いなく、5月の春合宿から本会議を終えるまでの約4ヶ月間はこれまでの私の人生において最も濃密で、そして特異な日々であったと言える。こんなにも環境、政治、人権などあらゆる

る問題について毎日考え、企業や政府機関など普段ならまず訪れることのない場所を訪問し、そして寝るとき以外はほぼ常に誰かが傍らにいるなどという経験はこれまでも、そしてこれからも二度とないであろう。

初めて日本側参加者が顔を合わせた春合宿から、私にとってJASCは特別な存在になった。これまで属したいかなる集団とも異なる摩訶不思議な“空間”、JASC。個性的過ぎるほどに個性的で、確固たる自分の主張を持ち、それでいて他者の意見を貪欲に吸収する寛容さも持つメンバー達。専攻する学問分野もこれまで育ってきた環境も、何よりももの考え方もまるで違うメンバーとの交流は、新鮮な驚きに満ちていた。またインターンなどを通じて作り上げた人脈やそれを活かす行動力など、他のメンバーが持つ私にはない能力に感嘆させられると同時に己の無能さ、至らなさを痛感する日々でもあった。

このように、日本側参加者35名との出会いで既にカルチャーショックにも似た衝撃を受けてしまった私にとって、アメリカ側参加者26名を加えての本会議がどれほど刺激的であったかは想像がつくであろう。フォーラムや分科会では世界的な課題について真剣に議論し、スペシャルトピックでは食文化や飲酒、さらには恋愛などについて白熱した意見交換を展開し、フリータイムでは家族や学校など様々なことについてアメリカの学生と話した。銃規制や環境問題に関する議論では、日米の学生の間にも如何ともし難い根本的な意識の違いを感じた。その違いは時に議論を膠着させることもあった。しかしこうした議論の御蔭で、私は日本で生まれ育ってきた中で当たり前前に思ってきたことを初めて意識し、アメリカ側学生との違いを生み出した日本の文化、慣習、社会について改めて考えることが出来た。「他国の文化を知ることは自国の文化を知ること」とはありきたりな言葉のようにも思えるが、アメリカで過ごした1ヵ月はまさにそのことを実感させるものであった。

JASCを振り返って一つ大きな後悔がある。それは英語の壁だ。ディスカッションでもフリータイムでも、日本語でなら発言していたであろう時に、適

切な英語が浮かばなかったために言葉を飲み込んだことが何度あったであろうか。これは私の英語力の不足だけでなく、意欲の不足だったのだと今になって思う。「変な英語を使いたくない」などというつまらないプライドなど捨ててもっと思いを口にすればよかった。伝えようとする気持ちを強く持つていれば、何度言い間違えても、多少変な単語を使っても、皆きつと耳を傾けてくれることはわかっていたのに。1ヵ月ではこの壁を乗り越えることが出来なかった。

最後に、丸1年を費やして60th JASCを作り上げてくれた実行委員、本当にご苦労様でした。学生主体でここまでやれるものなのかと、学生の可能性に対する認識を改めさせられました。そして、多忙なところ事前活動や本会議中に多大なご協力をいただいた皆様、快く送り出してくれた両親、JASCという素晴らしい経験を私に与えて下さった全ての方々に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

#### 新宮清香

日米学生会議、それは私にとって自分を見つめ直す場であり、かけがえのない仲間との出会いの場であり、社会とのつながりを強く意識した場であった。

私は普段なかなか自分を見つめ直す暇がなかった。しかし今回、日米学生会議という機会を通して、日本語で自分の意志を何の苦もなく伝えられる日常から、英語という制約された状況に自分の身を置くこととなった。また、様々なフォーラム・フィールドワークや内容の濃いディスカッションなどの非日常の世界に向き合った。これらの状況によって、私は生身の自分と向き合うこととなったのだ。日本語のように無意識に扱えない英語で自分の意見や思いを伝えるために、自分の内面を整理し、自分自身が何を考え、何を本当に伝えたいのか、真剣に考えた。さらにたくさんの刺激的人々に出会うことで、他者を通して自分と向き合うこともできた。様々な得意分野を持つ人々を見て、自分は何によってこの会議に貢献できるかを真剣に考えたのだ。そこで発見したのが、私は日本人であり、日本のすばらしさを紹介することが好きなのだということであった。そ

## 第5章 参加者の声

して何より、どんなにつたない英語でも、まず伝えようとするのが不可欠であると気付いたのである。

さらに、夏の会議で共にすごした仲間が私に様々なことを教えてくれた。英語に対して自身が持てず、挑戦することから逃げていた私に最初に勇気を与えてくれたのは、Special Topicと一緒にやろうと誘ってくれたアメリカ側参加者であった。その準備のときに、私の拙い英語を辛抱強く聞いてくれたことから、私はとにかく伝えようとするのが重要なのだと思った。また日本側参加者の中からも、英語を上達させるために日本人同士の日常会話でも英語で話しかけてくる人や、フォーラムで積極的に発言している人に刺激されて、私も頑張ろうと励まされたのである。そうして、私の日米学生会議における常に新しいことや英語に挑戦する日々が始まった。この挑戦し続ける姿勢を維持することができたのも、仲間のおかげであった。私がフォーラムで質問すれば、今日の質問良かったよ、とすぐに反応が返ってくるし、夜のフリータイムに仲間と政治や社会問題について議論するときも、お互い真剣に自分の意見を主張し、相手の意見を聞き合った。私が何かに挑戦する時、その何倍もの見返りが仲間から返ってきた。挑戦すればする程、自分が変わっていく喜び、仲間と繋がっていける喜び、全てが良いサイクルとなっていたのである。

さらに、事前準備、会議中のフィールドワークやホームステイなどを通して、社会に対する責任を日米学生会議が教えてくれた。日米学生会議初のアメリカ開催地となったポートランドで、会議への熱い思いを語ってくださったアルムナイの方々。ロサンゼルスでの大使館や企業訪問で出会い、お話ししてくださった人々。ホームステイで私たちにモンタナの暖かさを教えてくださった滞在先の家族。そして日本について、アカデミックであると同時にフレンドリーに私たちと議論してくださったハーヴァードの教授。また姿は見えないけれど、今会議に投資し、私たちに期待を持ってくださっている多くの人々。たくさんの人々に支えられて私はこのすばらしい夏を経験できたのだと気付いたので。

このような人々に感謝するためにも、私は今会議で学んだことを継続していきたい。それは、自分を見つめ直すことを忘れず、再発見した自分の良さを活かし、挑戦し続けることである。さらに、ここで出会った仲間との絆を大切に、これからも絆を深めていきたい。そして将来、仲間とともに日米学生会議で学んだことを活かして、社会に向けて新しいことに挑戦出来たなら、それが社会に対して示すことの出来る最高の感謝の形となろう。

### 神馬光滋

会議終了後、日米学生会議の感想を聞かれるとどういうわけか「尊敬できる最高の友人が出来て、やつらに触発された」、くらいしか言うことがない。本会議中、多様な背景を持つジャスカーたちと話しているだけで刺激的であったし、私にとっては新鮮な体験ばかりであった。一生忘れないような思い出や記憶だって数えきれないほどあるというのに。自分の感想力のなさに悩んでいると、私はあることに気付いた。「新鮮な」出来事に溢れる、刺激的な毎日が日常になっていたのである。それは、日本に帰ってきてでもOB・OGの方々と交流させていただいたり、スーツで学生対象のイベントに参加したりしてみることで、本会議中の「非日常」を「日常化」することができたからだと思う。そのような日常を本会議後も楽しむには、主体性やコミュニケーション能力が必要だと思うのだが、それを教えてくれた意味でも、出会いの面白さを教えてくれるきっかけを作ってくれた意味でも、日米学生会議は私の大学生活、そして人生の転機となった。ただし、今の私の生き方を否定してくる友人もいなくはない。「人を見下しているみたい」、とまで言われた。それは、自分が他の学生に触発をされた経験から、私もそのようなことが他者に出来ないかと、人に話をしたり、イベントを紹介したりしようとした結果、空回りをしていたのであると思う。しかし、最近ではグループワークやチームワークでの経験を通して、自分の役割を自覚することが大事だということが分かり(特に、誰もがリーダーでなくても良いということ)、いろいろな人がいて良いのだと考えるように

なった。以前ならば私が日米学生会議で学んできた生き方を絶対とし、その価値観で他者を触発したいと思っていたが、今では押し付けがましく私のライフスタイルを勧めることはなくなってきた、と願いたい。しかしやはり私個人としては、私が日米学生会議で学んだような日常が大好きである。日米学生会議参加前の私を否定するわけではないが、参加前はICUという狭い空間の中で、生活が完結していた感は否めない。第60回会議の参加者が初めて集った交詢社での激励会では、学生同士が名刺交換をしていた。ICUでは稀に見る光景である。私はそれでも衝撃を受け、早速100枚刷ってみた。また、本会議前の事前活動では、アメリカ人学生との交流があったため、その次の100枚は裏面英語も入れてみることにした。これは、今振り返ってみると、異文化交流さえも日常のものとなったのではないかと言えると思う。本会議ではアメリカ側参加者との共同生活であったので、異文化交流は前提としてあったのだが、一つ残念なのは、写真を改めて見てみると、日本人、またアメリカ人同士で写っている写真が多いということである。言語の壁は否定のしようがないが、日本側参加者として、日本以外の人や物とも柔軟に接し、相互的に触発が出来る関係を築ける勇気を養いたい。

ということで、第61回会議の理念は、Towards Global Awareness: Everyday Impact through Interactive Empowermentとなった。今後は、第61回日米学生会議の実行委員として奔走する日常を満喫していきたい。

高野恭平

手紙 ー未来ー

拝啓 この手紙を読んでいるあなたは、今何をしているのでしょうか。風邪などひいていませんか。

今私は第60回実行委員としての最後の仕事である報告書作りをしています。長かった日米学生会議との関わりももうすぐ終わりです。この1年半を思い返すと、様々なことがありました。私の大学生活

は日米学生会議なしでは語れないほど、この活動から多くのことを学ばせていただきました。

日米学生会議を通して、私は自分が作っていた「壁」を認識できるようになりました。本当のことを伝えることで人間関係に亀裂が入るのではないかと、流暢ではない英語をしゃべることで仲間に見限られてしまうのではないかと。そういった不安や恐怖が自分の思いを内に閉じ込めさせ、本当のことを言い合える真の友人を得る機会を私は幾度も逃していたのです。しかし、実行委員としての活動はそんな私の甘えを許しませんでした。より素晴らしい会議を作るとい志の下、私たちはとても永い時間を共有し、本気で語り合わざるを得ない環境にさらされることで、相手を深く理解すること、自分を深く理解してもらうことの心地良さを味わい、「壁」を越える勇気を学ぶことができました。そして、最高の友人たちを得ました。

日米学生会議を通して、私は誰かの為に働くことで得られる充実感の素晴らしさを知りました。戦前から続いてきたこの会議を、莫大な予算がついているこの会議を、そして多くの方の想いが詰まっているこの会議を絶対に成功させなければいけない。今まで背負ったことのないほどのプレッシャーのなかで、着々と医師となる準備を進める同級生たちを見て焦りを感じながらも、ずっと投げ出さずに仕事を続けられたのは、仲間のため、世界のためという思いが、そしてそれによって得られる充実感があったからです。いつしか私は自分の一生を誰かの為に捧げたいと思うようにまできました。生きる意味、人生の意義を奉仕に見出すようになりました。

私は本当に様々なことを日米学生会議からもらいました。だから、今度はあなたが日米学生会議に恩を返す番です。

後続を育てて下さい。私が学んだことを、後輩たちに熱をもって伝えて下さい。私も多くの先輩方のお世話になりました。時には厳しい父親のように、また時には全てを包み込む母親のように接していた

## 第5章 参加者の声

だき、道を見失った私の標となって下さいました。今の仲間とさらに深い交流をして下さい。仲間と共に頑張ってきたからこそ、日米学生会議を成功させることができたのです。それぞれが自分の力に合った役割をこなし、ひとつのチームとしてまとまったからこそ、このような大きな会議を動かすことができました。あなただけの力ではありません、うぬぼれないで下さい。今の仲間の方たちと力を合わせて、より大きな仕事をこなし社会に貢献してください。社会貢献という日米学生会議で得た思いを忘れないで下さい。

そして何より、自分の心の中にある誠実さを失わないで下さい。日米学生会議は数人の学生によって始められました。それが今まで存続してきた理由は学生の一途な思いによると私は思います。学生はたいした社会的地位もありませんから、権力も財力もたかがしれています。そんな私たち学生に多くの方が協力してくれているのは、何のしがらみにも囚われることのない「ただ社会を良くしたい」という学生の純粋な思いに惹かれるからではないでしょうか。思いは最高の武器です。どうか、この気持ちを保ち続けていて下さい。

あなたはこの日米学生会議の思い出をどれほど覚えているのでしょうか。ヒトは忘れることが得意な動物ですから、時を経るごとに私の記憶もどんどん色褪せていくでしょう。今の私にとっては日米学生会議がこの1年半の全てですので、それが消えてしまうことをとても寂しく思います。ただ、どうかこれだけは忘れないで下さい。私はずっと一生懸命頑張ってきました。時にズルすることもありましたが、この1年半本気で取り組みました。この私を誇りに思ってください。辛いときはこの報告書を読んで思い出して下さい。そして、胸を張ってこれからも生きていって下さい。

それでは、また十年後にお会いしましょう。それまでどうかお元気で。

敬具

2008年 秋 高野恭平

### 高畑乃枝

最終日、仲間と別れなくてはならなかった夜、私は号泣した。人生の中で、いつも涙をぐっとこらえてきた私の胸を、第60回JASCは熱くさせた。自分が成長できたからだとか、会議で言いたいことが言えたからではなく、JASCの仲間達と特別な時を共有し、お互いの存在や価値観を尊敬し合えることができたことに、感動した涙だった。私に、そのような経験を与えてくださった全ての人に感謝したい。

#### 【JASC応募への経緯】

私は三鷹の森で、平和ボケした日々を送っていた。そんな時、廊下の掲示板で武田委員長と目があった。ポスターを読んでJASCの存在を知り、これだ！これは絶対に面白いに違いない！と、興奮した。しかし同時に、「日米」という枠がひっかかった。それは私の二つの祖国であると同時に、愛せない二つの国だったからだ。両国を「ハーフ」として生きていく中で、日米の政治や社会に嫌悪感を抱いていた。あの時、そのまま通り過ぎてしまうことは容易だった。しかし、「日米」と向かい合わなくては、この先つまらない人生を送ってしまうかもしれないという気持ちが込み上げたので、JASCに応募した。この報告書を読んでいる学生の方が応募を迷っているとしたら、応募して欲しい。応募しなかった後悔よりも、応募した後に待ち受ける失敗の方があなたの人生を実らせるはず。

#### 【JASCの魅力】

JASCは「日米」という二つの国をベースにしているが、集う人々は日米という枠に収まりきらない背景を持っている。JASCの何よりの魅力は、各人の持つ背景や考え方を臆することなく見せ付け合える、柔軟な環境にあると思う。つまり、JASCerは「他者を受け入れ、理解しようとする」気持ちが備わっているのかもしれない。ポートランドのラウンジで、みんなで輪を作って自己紹介をしたときから、みんな顔に「君の事を知りたい」と書いてあるみたいだった。あのみんなの顔を見たときから、日米という枠への不安がどうでもいいものとなった。なぜなら、私たちは日本人、中国人、韓国人、アメリカ人だけど、お互いに知りたいと思っているのは、その



先にあるものだと確信したからだ。

JASCの多様で柔軟な環境は、議論をする上でも大いに発揮されたとおもう。私の所属していた通称「メモリー」RT（元「悲劇」RT笑）では歴史問題を語る上で、互いの価値観や地域的背景を交差させることで、初めて見えてくる議論があった。日本側の中でも、広島・沖縄・東京出身者としての問題意識に差異があることは、互いにとって発見であった。私は大学で歴史学を専攻しているが、各人の歴史観や価値観を議論する場はなかなか無い。それゆえ、JASCでの歴史認識に関する議論は、とても面白かった。なぜ、面白くなったのかというと、学生という立場を最大限に活用して、「本音」で語ることができたから。フォーラムやスペシャルトピックスでの議論でも、知識不足や議論展開の違いを乗り越えようと努力しながら、みんな腹を割って話そうとしていたことが今も心に残っている。

JASCに参加していなかったら、出会えなかった人、視点、機会、悔しさ、喜び、言葉、踊り(笑)、景色、抱擁、手紙、流れ星、励まし、寝顔、歌、ほほ笑みのことを考えると、あの時JASC（タケ）と出会って本当に良かったと思う。

ただ、自分がJASCを通してどう変わったかは今も分からない。今分かることは、自分はJASCを「体験」したのではなく「経験」したという事実。そして、私がJASCで出会い、感じたすべての「経験」を無駄にはしたくないということ。青春の荒波の中を「第60回JASC号」にみんなと乗って航海できたことを、私は誇りに思う。ありがとう。60年後の夏に、また会おう。

### 竹内菜緒

第60回日米学生会議一。それは、私の中で永遠に続くものであるはずで、ここ1年の日常生活の中心であった。価値観やバックグラウンドが異なる者たちで、一つの会議を作り上げるというのは、簡単なようであるが、決してそうではなかった。しかし、だからこそ誇れる会議だ。私にとっての第60回日米学生会議を三部に分けて紹介していきたい。

第一部は第60回の参加者が決まるまでの準備期

間。その中でも特に印象的なものは広報活動だ。第60回の参加者に会いたくて、広報作業に夢中だったあの頃。覚えてのイラストレーターを使ってポスター等のデザインの作成をしたり、一人で恐る恐る印刷会社に訪問したりした。全国300の大学にポスターを貼ってくれないかと慣れない交渉の電話をかけ、地味な発送作業を行ったあの日々。ウィルコムで同じ志を持った実行委員と今後の広報戦略を話した日々。私が壁にぶつかった時はいつも、手を休めじっくりと話を聞いてくれ、一緒に解決策を考えてくれた。広報は対外的に団体の顔となる仕事のため、一見派手な役割に見えるが、やることはとても地味な作業ばかりだった。時に仕事を投げ出しそうにもなったり、衝突があったり、大泣きしたこともあったが、その度に同じ実行委員に支えられて、最終的に私はこの仕事を通し、本会議を成功させる自信と彼らとの信頼関係を得ることができた。

また、アメリカ側実行委員とは、コミュニケーションのツールがウェブと限られていたため、コンセンサスをとるのになかなか大変だった。分科会においても、環境問題についてウェブ上で議論を行いながら分科会の構成を考えたり、ポートランドサイトも、知らない土地の情報をウェブで検索しながら、日本側・米国側コーディネーターと共にスケジュール案を考えていった。時には価値観を衝突させ受容しながら、個人感の絆も深めていった。事前準備に全く悔いがない、といったら嘘になるが、他の実行委員から多くの事を事前準備の段階で既に学ぶことができたことに満足している。

実行委員との激しい衝突があったからこそ、一緒に会議を作りあげていく参加者に出会えた時は、初恋が突ったような思いを感じられた。

第二部は、そんな彼らと一緒に過ごした時間について。本当に時間の流れが早く感じられた。春合宿、防衛大学、直前合宿とコーディネートを行うのは正直大変だったが、参加者の成長や笑顔が楽しみで、それを考えたら睡眠時間を削って一つ一つのイベントを丁寧に企画・運営することも苦に思わなかった。また、分科会の準備も感慨深いものがある。分科会のメンバーには特にお世話になった。頼りない分科

## 第5章 参加者の声

会リーダーを、よくもここまで助け、ともに最高の分科会を作ってくれたと思う。事前活動中も、本会議中も、私の能力に足りない要素を他のメンバーが分科会に補ってくれることによって、一つの「環境とコミュニケーション」の分科会が成立していた。このように1年のほとんどの時間を費やして企画した本会議は、モンタナで見た流れ星のごとく時間は早く過ぎていった。本会議で最も私が誇らしく思ったこと。それは、間違いなく第60回日米学生会議の参加者たちであると思う。

そして本会議が終わった今一第三部が始まる。日米学生会議はこれからずっと終わらない。いくら第60回の会議が最高だったと思っても、実行委員として恥ずかしながら達成できなかった目標もあるし、後悔している点もいくつかある。しかし、達成できなかった、だけでは終わらせたくない、なぜならその後悔も日米学生会議の一部なのだから。今後、ひとつひとつその目標を達成していく。私はこれからも前に向かって進んでいく。この会議で「成長した」と言い切らない理由は、今もその過程を踏んでいるから。日米学生会議を通して、個人と個人、個人とコミュニティの繋がりを感じられた。その可能性を信じて、今後は私が社会に何かしていきたい。takeばかりでなくgiveもしなくちゃ、と思う。矛盾だらけのこの社会ではあるが、可能性も確かに存在する。人間が社会をつくり、そのような社会が私たちの、時には矛盾する、規範をつくっている。その責任を負うべく「社会貢献」したい、と思う。それが私の中にある、一生をかけて完成する予定の第3部である。今後も、第三部は永遠に続きますように、と願いながら。

最後に、国際教育振興会の職員の皆様、多くのアルムナイの皆様、多数の支援者の皆様、実行委員会の皆、参加者の皆に心からのお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

### 竹内友理

モンタナ州、ミズーラ市の山の上。下には夜景が広がり、暖かい光が橋や道路、モンタナ大学のフットボールフィールドなどを包んでいる。目線を上げ

るとそこには満天の星が輝いており、ときどき流れ星が流れる。“Nine!!” “I missed it again!!!” みんなで仰向けになり、見つけた流れ星の数を競い合いながら、私は願い事をしようとタイミングを見計らっていた。

私は小学生の頃から日米学生会議の存在を知っており、機会があれば参加してみたいとどこかで思っていた。しかし、アメリカと日本の両国で人生の半分ずつを過ごしてきた私にとって、日米学生会議に参加するということや、参加したいと思うことはある意味で当然のように思えながら、考えれば考えるほどまたある意味で、全く意味のないことにも思えた。私は自分のことを完全なる『日』とも『米』とも捉えていなかった。むしろハイブリッドの『日米』そのもの、もしくはそのどちらでもない『無』だという意識の方が強く、そのいずれであろうと、参加することで何か新しい発見や成長があるのかどうか、分からなかったからだ。

日米学生会議を通して私の中で何が変わったということを確認し、整理し、言葉にすることはできないし、仮に言葉にしたところで伝わるものではないと思う。しかし上記のような懸念が激しく的外れていたことは確かである。米国中から集まった学生との交流の中で自分が予想以上に自分自身と彼らの『違い』を感じたことや、会議を通して物心ついてから今まで感じたことがないくらい強く、彼らに日本について『分かってもらいたい』と感じている自分に気付いたことなどはその印であり、私にとってかけがえのない発見であった。第60回日米学生会議は、『相手を知る』というよりも、『自分を知る』という意味において本当に貴重な経験であり、それこそが私にとっての『会議に参加する意味』であったのだろうと今では思う。

もう一つ、私が会議から得たものは、心から信頼出来る仲間である。

日米学生会議史上最大の応募者数の中から『偶然』に選ばれた日本側28人、アメリカ側18人の参加者。面接の中であの一言を言っていなかったら、書類のエッセーをあの題材で書いていなかったら、もしかしたら私はいなかったかもしれないし、夜通し喋っ

たあの子やお腹が痛くなるまで一緒に笑ったあの子も参加できていなかったかもしれない。しかしそんな激しい競争の中、『偶然』とはいえ実行委員が選抜した他の45人のデリゲートは本当に優秀で、素敵で、皆どこか飛び抜けたところのある『変』人たちで、そんな彼ら(そしてもちろん、史上最高の実行委員の16人)と共に第60回の旅をするジャパデリ28人目として選ばれたことを光栄に思う。

日米学生会議で作られる絆には、どこか特別なものがある。会議中、JASC OB/OGとお会いする中でそう感じさせられる機会が幾度かあった。ご自身が参加した会議から30年経った今でも参加者同士で文通をしているという方、自分の参加した会議からは8組もJASC結婚が生まれたのだという方・・・時間を経てもなお変わらずに固い絆で結ばれている先輩JASCerのお話を伺いながら、自分が今正にその絆の生成過程にあるのだということが少し不思議に思えた。しかし62人の学生と1ヵ月も寝食を共にするという一生に一度の機会を経て、私たちも気付けば日常ではあり得ないほど深く互いの長所・短所を知り、それらを認め合った上で仲を深めていったようだ。そうやって築き上げられた関係の下には信用と信頼の根が這っており、壊れたり忘れられたり失われたりする方が難しいようにさえ思える。(特に仲良しで『アツイ』ことで本会議前から噂になっていたというCSR分科会の仲間には、特に感謝している。春合宿でRTリーダーの伊関くんが『家族みたいなRTにしたい』といていたのが今では懐かしく思えるが、本会議が終わった今、CSR分科会は自分にとって本当に家族のようになっている。沢山の本を読み、議論を重ね、狂ったようにメールを回しまくっていた4人は、これからもずっと私にとってのinspirationであり、心の支えであり続けるだろう。)

結局、気まぐれで恥ずかしがり屋の流れ星に直接願い事することはできなかった。いや、あの夜頭の中では、ずっとそのことしか考えていなかったから、むしろペルセウス座流星群全体に願い事していたのかもしれない・・・今となってはどちらでも良い。『このみんなの間で、一生この関係が続き

ますように。』お星さまに頼る必要はなさそうだ。

今では必然としか思えない第60回参加者とこれから一生の付き合いが出来る楽しみを胸に、これからの1年間、第61回実行委員としてまた新しい発見と絆の生成に貢献したいと思う。

#### 武田尚樹

振り返ればこの1年間、パソコンに向かえば講演会や会議の企画、事務所へ赴いては伊部事務局長との会議の方向性や財務についての相談に明け暮れていた。終わって1ヵ月が経った今、事務所での作業や実行委員の皆とのミーティングがないことで、よりJASCが自分の生活の大きな一部であったことを実感する。最初はミーティングが思うように進まなかったり、渡航費が高くて会議が縮小される危機があったりした。山のように積みあがったポスターを折って送付する作業、クリスマスの企業回り、選考時期に明け方までデニーズでこなした作業、苦労話をあげればキリがない。しかし、事前準備を追い5月の春合宿で日本側のデリゲートに会ったとき、それまでの苦労が形となっていくことを実感した。

初めて参加者が顔を合わせた春合宿で、反省の一つにあがったのが実行委員とデリとの壁。これはメリットとデメリットの両方がある。実行委員業に徹することにより、参加者をうまく誘導でき、プログラムはスムーズに進行されていく。しかし、果たしてそのプログラムは良かったのか。意義のあるものだったのか。それを検証するには参加者の立場を通して参加するほかない。春合宿を機に「参加者の視点」を意識して実行委員の仕事に打ち込もうと心に決めたが、実際に本会議で参加者に近い実行委員長を務められたかと思うと確かではない。なるべくデリと会話し、会議に対する不満や英語力の悩みなどを聞きだそうと努力したものの、どうしてもフォーラム中に次のイベントのことが頭に入ってきたり、トランスポートションが大丈夫か心配したりと実行委員意識が抜け切れなかった部分がある。

そんな悩みも胸に抱えつつ、自分たちが1年近くかけて企画してきたものが現実となってどんどん実行されていく。1年間かけた企画が一日単位で消化

## 第5章 参加者の声

されていく。複雑な思いではあったが、参加者がかけてくれる感謝の言葉、批判の言葉、「楽しかった」という一言は、それまでの苦労や悩みをすべて吹き飛ばした。本当に嬉しかった。

参加者であった59回のJASCは自分なりに楽しむだけだった。会議が終了してからも、次の参加者に楽しい思いをしてもらえればそれでいいと考えていた。しかし、財団や企業、アルムナイの方々と話していくなかで、JASCの意義について深く考えさせられた。財団や企業から頂いている賛助に見合うだけの価値が私たちの会議にあるのか。JASCを続けることに果たして意味があるのか。委員長として悩まされることが多々あった。講演会の挨拶などで自分が口にするJASCの魅力や社会的な意義など、建前だけの発言だと思ふこともあった。一つ一つの企画に大きな理念と夢を抱いて挑んでいったものの現実はその甘くない。予算の問題、学生の限界、自分の未熟さのせいで自分が理想として描いていたフォーラムが次々と縮小されていく。悔しかったし、自分の力の無さを痛感した。しかし、この1年をかけてJASCから寄せられる意見が社会で重要視されること、私たち学生にこそ担うことのできる役割が存在することを実感するにつれ、JASCの理念一語一語が委員長として偽りの無い確かな本音になった。

一方で、現時点では会議が社会全体に変化をもたらしたか否かは定かではない。だからこそ、これがこの先の課題であると思っている。これからどれだけ自分がJASCを通して学んだことをJASCで出会った人々と一緒に活かしていくか。忙しい実行委員生活は終わったが、これからより一層努力をしなければいけないと思う。

### 田中 豪

「アメリカどうだった〜？」

日本に戻ってきたから、よく友達に聞かれる。

「うん、楽しかったよ〜♪」

そう答える私。むしろ、そうとしか答えられない私。多くの人は僕の余りに単純な答えに怪訝そうな顔を見せる。あるいは、それに続く次の言葉を待っている。そんな友達の様子を見て、慌てて何かを付

け加えようとする。自分が訪れた場所のこと、アメリカでできた青い目の友達のこと、自分が少しは英語を話せるようになったこと…。申し訳程度に付け加える。

では、自分にとって、この夏の経験はその程度のものでしかなかったのだろうか。その点に関しては、否、と言いたい自分がある。そこで再び自分に問いかける。この夏に得たものは、何であったのか、と。そう考えると再び答えにつまる。

この夏に、自分は何を獲得し、何を獲得できなかったのか。そもそも、自分は何を期待して渡米したのだったのだろうか、とまで振り返る。

ところで、日米学生会議が掲げる大きな目標の一つは事後活動としての社会発信である。それは、まさに今の私に求められていることと言えるのかもしれない。

では、何を社会に発信していくのか。日米学生会議を学生の国際交流団体という視点から捉えれば、「国際交流の大切さ」、「グローバル」、「平和」、「国境を越えた対話」という言葉が浮かんでくるだろう。しかし、それらの言葉も自己の内面の深い理解から紡ぎ出されていないかぎり何の意味も持たない。

この夏に得たものは、何であったのか。その問いに満足に答えられないうちは、社会発信の第一歩目すらおぼつかない。

ここで新たな問いが生まれる。そもそも社会発信は必要なのか。なぜそこまでこだわるのか。しかし、その答えははっきりしている。この夏がなかったら…と想像すると、ある意味でぞっとする自分がある。この夏が自分にとって大切な経験であると言いたい自分もいて、そう断言できる自分もいる。最後に、社会発信を通してできるだけ多くの人に知ってもらうことが何かプラスになるのではないかと、思う自分がある。そこから先への一歩。それを模索する日々は続く。

僕の第60回日米学生会議はまだ終わらない。

### 中村玲奈

志望動機シートをメールした日、直前合宿前日、

本会議中15日目、そして会議終了後の今日でさえ、その「宝箱」の中に詰まった無限の可能性に思いを巡らし、まるで銀河の闇に輝く宝石を手探りで探しているような、そんな不思議な興奮と高揚感に包まれるような感覚を味わうことに変わりはない。そんな「宝箱」がついに開かれた本会議、その走馬灯のように過ぎ去り、それでいてあまりに密度の濃かった時間の中で、結局のところ私は何をみつけたのだろうか？

その答えを表現する言葉はいくらでもあるだろうし、列挙すればどれもそれらしく思えてくることに違いはない。しかし、その中でも極めて深刻なものがあつたのである。中村玲奈という人間が生きてきた時間の中で「初めて」の発見であり、「初めて」の出会いでもあつたそれは、彼女の中に大きなインパクトを持ってとどまっている。

それはベタな表現をするのであれば、ボーダーを越える(というよりは消すといった方が私にはしっくりくるような気がする)フレンドシップでもあり、同時に知らない自分との対面であつた。

元来ネイティブではなくとも英語に多少の自信があつた私は、「日本人は英語が話せない」というステレオタイプに対してコンプレックスを抱いており、「自分は出来る」というプレッシャーとプライドを自らに対して無意識にかけていた。会議が始まって2週間は、相手に甘く見られないように流暢な英語で議論をしなければ、日常会話くらいさりとこなさねば、といった具合だつた。しかしなんととっても25日間、24時間の長丁場。会議半ばにして、プライドを守っているだけの体力は尽き果てる。

そこには単に体力という理由以外のものがあつた。それは、そんなプライドの塊の自分と会話をすするアメデリの姿勢だつた。私自身が「ステレオタイプを持っている、コミュニケーションのsuperiorたち」というステレオタイプを通して見ていた彼らは、常に真剣な眼差しでこちらの話を聞いていた。彼らの目が「君を理解したい」「君の考えを知りたい」ということ、しいては「同じ人間がコミュニケーションをとっている」ということを気づかせてくれたのだ。分科会では特に、「人々に対する環境問題の啓発や

環境関連政策に関するメディア媒体を中心とした効果的なアプローチ方法」などを考察していたため、当然ながら日本語であっても理解の難しい単語、ロジックが飛び交う。不自由な左手を使って箸で小豆をつまみ上げるような感覚だ。毎回のディスカッションが真剣勝負で、それでやっと「土俵」に上がれるといった感じだろうか。そんなハードな分科会での一場面、なにより、私の話を真剣に聞くアメデリの目が、自分の意見を必死に伝えようとする私に自信を与えてくれたことを思い出す。

「彼らは私を理解しようと努めている」

単純であるが、そんな気づきに肩の力が抜けていくのを感じた。そんな本当の意味での言語の壁が崩れ始めて、こんなことを思った。

「英語を話すためには話せることを選ぶのではない。話したいことを、英語を使って伝えるのだ。言語は、ツールにすぎない。日本語、そして日本人という要素は、ツール、型なのであって私を代表してはいない。私という人間は型にはまりたくもなければ、型の中に隠れて見えなくなるのもいやだ。」

その時、長年心の底にあつた「外国人と本当の友達になつたことがない」というコンプレックスと、彼らと話す時に毎度感じる「自分が自分でなくなる奇妙な感覚」が頭をよぎつた。つまりは、『話す』ために言葉を選んでいたので、本当の自分が思うことを伝えられなかったということか。自分が壁だと思つていたものは、自分が自分の前に作りあげた、英語を話すための誰かだつたのだ。誰かの友達が自分の友達でなかつたのは極めて自然なことだ！

そんな気づきから日はどんどんと流れ、8月19日。すっきりと晴れた空の下、夜とはうって変わって穏やかなボストンコモンズの中を私とCharityは歩いていく。ハワイ出身、バックグラウンドも生活スタイルもまったく異なる彼女とは、LAでルームメイトとなつた時から不思議と気が合つた。24時間後に迫つた別れを前に、伝えたいこと、聞きたいこと、残された時間を無駄にはしまいと焦るようにしてお互いを知らうとしていたのがわかつた。

不思議だつたのは、一人の人間としての「人生」に対する考え方、将来達成したいこと、愛、そういつ

## 第5章 参加者の声

たことへの考え方が奇妙なくらいに一致していることだった。「日本の友人にも理解を求めたことのない私を、生まれて初めてここで出すことになるとは。」感動にも似た高揚感に心は弾んだ。

別れの時、Charityが私を抱きしめて言った一言をこれからも忘れることはないだろう。その言葉は、「日本」と「アメリカ」という作られたボーダーの中に生きてきた自らの価値観を、未来に向けて変えるものでもあった。

「Sister, the other side of me…」

胸のうちに熱くこみ上げるものがあった。ボーダーは、消えていたのだ。言語のそれも、人間同士のそれも。それが、JASC60という「宝箱」に入っていた最高のtreasureだったと、私は自信を持っていることができるだろう。

### 仁平理斗

第60回日米学生会議と聞くと、まずその数字に驚かされる。軍国主義を背負った日本と、民主主義を掲げる日本を一つの架け橋が見つないでいる。1934年に始まった第1回日米学生会議を想像する。日本の思想、教育、国際的立場、経済力、政治体制、危機意識、何もかもが違う中、こうして第60回に参加できたことを大変光栄に思う。そして、これまで日米学生会議を絶やすことなく、引き継がれてきた先輩方に深く感謝する。

2008年8月初旬、ロサンゼルスにて、「日本の未来」について参加者同士で話し合う機会があった。専ら我々日本人学生の関心は、ジャパンバッシング、ジャパンパッシングにあらず、ジャパン「ナッシング」にあった。飽和状態にある日本経済を尻目に、著しく経済成長を続ける新興国の影に埋もれ、日本は興味関心をアメリカにすら、持たれていないのではないだろうか。任意参加のこのディスカッションに、3人のアメリカ人学生の姿を見て、コーディネーターの日本人学生が、「ナッシング」は免れたと言った。事実、彼らのうち2人はたくさん発言をしたし、その内容も日本を褒め称えるものが多かった。しかし、参加したアメリカ人学生がそもそも親日家であるということと、アメリカ側参加者が30名弱いるという

ことは、「気づかない振り」ではすまない事実であった。

単純な疑問が浮んだ。彼らはなぜ親日家なのか、日本の何に魅力を感じているのか。話をしていくうちに、その根源がどうやら日本の「エンターテインメント」にあることがわかった。ハリウッド、ブロードウェイ、ラスベガス。エンターテインメントの代名詞を数多く所有するアメリカが、日本のそれに魅力を感じているということは、韓国人に「日本の焼肉おいしい」といわれることに何となく似ていた。ドラマ、アニメ、ファッション、ときにはメイドカフェ。日本の大衆文化がアメリカで受け入れられているのだ。日本はアメリカ文化の恩恵に与っているという雰囲気、幼少期から感じていた私にとっては、とても新鮮な出来事だった。(私は日本で生まれ日本で育った。)戦後を振り返ると、日本は、「戦争」「神風」という時代を払拭して、「技術力」「勤勉さ」という時代を勝ち得た。それらを前提とし、これからは「エンターテインメント」という要素に注目すべきではないだろうか。それが直接的あるいは間接的に利益をもたらして、日本社会が更なる成長を遂げるきっかけとなるのではないか。日米学生会議を通じて、日本の将来と日米関係について、一人の日本人として思案に暮れた。と同時に、例えば世界の貧しい人々の存在が、エゴイズムという罵声を自分に浴びせた。そして、実際に裕福でない国々を旅行して、自分の感情が愛国心なるものであるということに気がついた。自分がお世話になったものに対して、恩返しをちゃんとしなくてはいけないと思う。

最後になりましたが、共に1ヵ月間を過ごしてくれた参加者のみんな、毎日あなたたちから、色々なことを学ばせていただきました。この出会いにとっても感謝しています。ありがとう。

### 比嘉慎一郎

JASCが終わって早1ヵ月が過ぎようとしている。それでもJASCシンドロームから抜け出せない。一生のうちでもおそらく最高の夏を過ごしたと思っているからそれも仕方ないが(笑)沢山ある思い出から今回は二つ焦点を当てたいと思う。

## 【課題】

JASCで何を学んだか??と聞かれれば迷わず「成長するための課題」と答えるだろう。

それほど自分にとってJASCは挫折を感じ、成長している瞬間を感じ、それと同時にもっとみんなと一緒に成長したい、という欲求が生まれる場所であった。他の参加者より英語が出来ないので足手まといにならないか。レベルの高い会議の目的をみんなと共有できているか。数少ない理系で、しかも女性が多くを占める分科会で適切なコミュニケーションが取れるか。今振り返っても答えはどちらかと言えばNOだったと言える(笑)

でもそれはJASCが自分に与えてくれた、自分を成長させるためのこれからの課題だと信じている。

そんな課題を一緒に見つけてくれた個性派ぞろいのRTメンバー。アメリカから帰国する最終日、そのままカナダに留学するヨシと「今度会うときはもっと英語うまくなってよう」と誓った。祥ちゃんとは、ともすれば揺れがちなJASCでの存在意義について沢山語ったし、につひ一の「自分達がJASCに参加できるのは世の中からの投資のお陰である」と言う言葉はすごく響いた。

そしてJEC。もちろん会議全体の舵取りをしてJASCをまとめあげたことだけでも賞賛の嵐だが、ストーキングしてただろ!?って突っ込みたくなる位絶妙のタイミングで日本語で話しかけてきてくれて、挫折から来るストレスを溜め込まず、課題であるとポジティブな考えに至ったのは間違いなくアナタ方のお陰です(笑)ありがとう!

## 【アメリカと日本、時々沖縄】

長いフライトを終え、アメリカのリードカレッジについた初日。自分の不安はピークに達していた。自分が他のジャパデリ(日本側参加者)とは少しずれた考えを持っていたからである。『アメリカが好きとは言えない』それは自分が沖縄で生まれ育ったという背景から来たもの、即ち祖父母や学校から教わった沖縄戦や今なお沖縄が抱えている問題からきたもので、それらを思うと果たしてこれから1ヵ月やっていけるのかと不安になった。

加えて英語がそこまで上手く話せないで自分の

意見がアメリカの人たちに上手く伝わらないのではないか……。しかし、実際は会議が始まってしまふとそんなのは全くの杞憂だったことに気付いた。もの凄い知識と共に流れてくるみんなの情熱はなんとも得がたいものであったし、何より驚いたのは出会った多くのアメリカ人が自分の事をJapaneseであると同時にOkinawan(沖縄人)としてみてくれた事である。「沖縄のことについて教えて!」、「このことは沖縄ではどう思われているの??」と興味津々で尋ねてくる彼らに自分の知識、想いを全力でぶつけた。そうして話が終わると彼らは「あなたに出会えて良かった。沖縄のことを知ることが出来て良かった」と言ってくれた。それはとても嬉しい事だった。

そしてアメデリ……。my buddyで来年のアメリカ側実行委員長のColin、つたない日本語を使いながらも自分とホストマザーとの意思疎通を図ってくれたJon-Michael、Karenとは一晩中恋バナしたし、ChienとHannahには間接的にフラれたなー(笑)

そしてTurner……。沖縄の基地で勤務シイラクにも行った元軍人でアメリカ側のECだった彼とは分科会は違うが、沖縄に関しての色々な話をした。それこそ地元の変な替え歌から極東の安全保障についてまで。真の相互理解ってのは学術的なところからではなく人と人とを原始レベルで徹底的に語ることから生まれるのだろうかと思った。

そして会議の最終日、『アメリカが好きだ!!』と言える自分を見つけた。そう、かけがえのない友人たちは自分を凝り固まった一意的な視点からの束縛を解き放ってくれた。これもまたJASCの理念に沿っていると勝手に思っています。

最後に一言、『挑戦とは一歩ではなく二歩踏み出す事』これは自分が好きな言葉である。JASCに参加したところが一歩目だとしたら、自分達の挑戦はこれから始まると思う。そう、今こそ二歩目を踏み出すときなのだ。自分の事、沖縄の事、アメリカの事、日本の事、世界の事、これから挑戦することは沢山在る。JASCerと一緒にならそれらを成功させられると私は信じている。

## 第5章 参加者の声

### 廣瀬祥子

「JASCerとして選ばれた」と言うよりも「運よくJASCerになるチャンスをもたらただけだ」としか思えなかった。アメリカに行くのも、アメリカ人と友達になるのも初めてだった。果たして自分がJASCでやっていけるのか、友達すら出来ないのではないかと不安で心配で仕方がなかった直前合宿・本会議前。いざその輪の中に飛び込んでみると、あっという間に夏は過ぎ、たくさんの思い出、かけがえのない友達、何度も眺め返してしまう数々の写真を私は今手にしている。

参加者の声を記すにあたり、何を書くのかを相当悩んだ。上手くまとめられない上に、1,600字では到底書ききれないが、ここでは私がJASCで感じた三点に絞って紹介したいと思う。

#### 【日本人とアメリカ人】

JLPとして開かれたお好み焼きパーティー。はじめは和気藹々とみんなで作り始めたお好み焼き。気づけばいつしか作業をしているのはジャパデリだけで、アメデリはカウチに座って楽しく会話。一度には全員分が焼けない為、出来たものは順にアメデリへ。次第に次の予定の時間が迫り、ジャパデリは慌ててお好み焼きを食べていた。勿論この構造に誰も不平・不満はないし、本当に楽しいひと時だった。

ポートランドサイトでの移民ディスカッション。議論内容を発表するため、各グループに二枚の画用紙が配られた。何を書くのかを話し合う間もなくさっとペンを執り画用紙へ思うままに書き始めたのはアメデリ二人で、ただそれを見ているしかないジャパデリ。

日本人とアメリカ人だからなのか、それとも個人の性格なのか。普段はあまり気にしないが、自然に日・米が別れる様子を目撃する度に何とも言えない興味深さがあった。

#### 【学ぶ姿勢】

意識一つで「学び」が変わる。大きなフォーラム、フィールドトリップ、前の席に座るか・スピーカーの近くに行くか、それとも後ろの方にいるかで話を聞く姿勢が随分違ってくる。英語を学ぶチャンスもJASCの日常に溢れている。分科会中の議論、

JASCerとの会話、ショッピングでもらう何気ないレシートにまで。与えられた学びの場だけに頼るのではなく、自らそのチャンスを探し、作り、吸収していくことが重要なのだと実感。やはり「全ては自分次第」。

#### 【悔しさ】

率直に言うと、私は今回のJASCにおいて、自分自身の役割が何だったのか、どう貢献できたのかが明確に分からないままだ。英語も出来る才能ある人たちが揃った自分のRT。議論についていくのが必死で、自分の意見も上手く主張できない事も多くあった。“The Japanese American National Museum”でガイドの方が案内をしてくれていたこと。「面白い」と口を揃えて興味深く話を聞いているグループの皆とは対照的に、何も英語が分からない自分。思い出せばきりが無い、自分に「悔しい」感情を覚えた瞬間。自分自身の厳しい「現実」に向き合わなければなかった。時には抑えきれず、涙があふれた。しかしそれは同時に、そのようなやりきれなさを親身に受け止め励ましあう仲間が常に隣にいるという、JASCの魅力を感じた瞬間でもある。

私はこれらの経験をどのように活かすか。ただ楽しかった、悔しかった、たくさん学べた、かけがえのない友達が出来た、では終わらせられない。JASCerとしての私の役割はこれからののだと感じている。辛く悔しい思いをしたあの瞬間は、今と今後の自分自身の糧にして、貴重な友達と経験は心の支えにして、一人のJASCerとして生き、JASCで出会ったアラムナイたちのように社会に貢献してゆける人間になりたいと思う。こうした前向きさと、将来への目標を得ることができたのもあの1ヵ月のおかげである。

最後に、60回のJASCを作り上げてくれた七人の実行委員をはじめ、今年の参加者、アラムナイの方々、そして今回JASCに協力していただいた方全てに心から感謝している。

### 廣田隆介

何かをオーガナイズする経験を通じて自己成長したい、そして単純にもう一度JASCを楽しみたい、



そのような思いを抱いて第60回実行委員に立候補したことを今でも覚えている。思えば大学に入学して以降、一つの物事に長い期間をかけて取り組んだことは無かった。海の家運営、政策立案コンテスト、インターンシップなどを一匹狼的に梯子していくことで色々な経験を積んでいると自分に言い聞かせていたが、それは何かに長期間仲間と共に取り組むということへの恐れの裏返しでもあった。しかし日米学生会議に出会えたことで、そのような恐れは全く無くなったと自信を持って言える。というのも第59回会議に参加して、一緒に働きたい、議論し合いたい、夜通し遊びたい、ライバルになりたいという仲間たちに出会えたからだ。そう確信できたことで、第60回実行委員に立候補することができた。

実行委員生活は予想していた以上にタフだった。自分の担当である報告書と企業財務に加え、何々担当などの臨時的役割を常に抱え、手が空いている時は広報や選考を手伝い、また11月から年明けの2月まではほぼ毎月講演会などの大きなイベントを開催するというハードスケジュール。予定帳はいつの間にかJASC関連の用事で埋め尽くされ、夜はパソコンに張り付いてSkypeミーティングに参加し、その合間に就職活動を行い、学校に関しては殆ど犠牲にするという有様であった。特に肉体的にも精神的にも苦痛を極めたのは、選考が本格化した3月。第1希望群の会社からまだ内定が出ていないのにもかかわらず、応募者を面接したり、評価したりしなければならないというジレンマ。加えて、選考とジョブの日程が被り、皆の理解と協力を得てオリセンから会社に通ったこともあったし、京都での10日間の選考合宿中には、何度も周りの就活生から置いて行かれるような感覚に襲われた。それでも実行委員を辞めたいと思ったことは一度も無かったし、このような苦難を仲間と共に乗り越えた時の達成感は、また次のステップへと自分を駆り立ててくれた。

そして春合宿、ついに第60回のメンバーが一堂に会す日がやってきた。第60回日米学生会議の公式なスタートである。しかし、ここで大きな壁にぶつかった。JASCが全く楽しく感じられなかったのである。アメリカ側分科会パートナーの突然の辞任や、神経

質過ぎる己の性格も加担したのか、運営側と参加者間の壁を感じ、なかなかデリと一緒に楽しくなることができずに常に一步引いており、初めて実行委員という立場を後悔した。しかしそんな困難も、デリがJASCに積極的に関与し始め、また自分もデリと同じ目線で会議から何かを学び取る時と、実行委員として振る舞わなければならない時の境目が見えてきたことで乗り越えることができた。こうして60th JASCがどんどん楽しくなり、事前活動はほぼ全参加することになったのだった。

そしていよいよ、待ちに待った本会議がスタートした。アメリカで、英語で、ミス無く様々な活動を行っていかなければならない重圧。苦労した1年間の成果は、全てこの本会議の成否にかかっていた。しかし会議を心の底から楽しんでくれているデリゲート達の姿を見て、実行委員冥利に尽きると心の底から思うことができたのだった。

今この文章は、実行委員としての肩書を取り払い、この1年間の出来事や感想を素直に綴っている。身勝手な文章で申し訳ないが、ここには書かれていないJASCが果たしてくれた役割、JASCの意義、JASCの未来、そしてJASCを巣立った私たちがこれから為すべきことなどのトピックに関しては、JASCerといつまでも語り続け、考え続けて行きたい。最後に、共に一夏を過ごした63人の仲間たち、私達にJASCの未来を託してくれた59回の皆、日米学生会議を支援して下さった皆様、そして私のJASCへのコミットメントを支えてくれた友人や家族にお礼を言いたい。本当にありがとうございました！

#### 菅田有里

私にはいつも客観的に自分を見つめているもう一人の私がいる。この私は時にやっかいな存在で、思い切りはしゃごうとする自分にブレーキをかけたりする。しかし、日米学生会議中はありのままを受け入れてくれる仲間の中、居心地が良すぎて、私にはめずらしく心のブレーキが外れ「思い切り」はしゃいでしまったように思う。

積極的に自らを試す場に身を持っていき、自分を

## 第5章 参加者の声

変えようとする仲間は、私の眼を大きく見開かせてくれた。大人しそうだった印象の人が最後まで自分の意見を曲げない人間に、人の意見に全く耳を貸さなかった人が人の意見と妥協していくように、自信のなさそうだった人が積極的にフォーラムで質問するようになるなど、仲間一人一人の確実な変化、変わろうとする姿勢は会議中、私の原動力になった。アカデミックな活動と共に、時間を見つけては仲間と語り合ったことも忘れられない。部屋で枕を並べながら、時には夜の川辺、星空と夜の街に挟まれながら山の頂上で、移動中や食事の時、公園で、芝生で寝ころびながら、挙げればきりがない。語り合いを通じ、仲間一人一人の奥深さに触れたことは、私が密かに抱いていた「人」に対する警戒心を温かく溶かし、「人」ともっと向き合ってみよう、背中をポンと押してもらったような気がしている。

触発される経験がしたいーそんな思いを見事に日米学生会議は叶えてくれた。

上手くディスカッションをリードできず悔しい思いをしたことや、価値観が真正面から衝突し、なかば口論になりながら議論したこと、ディスカッションを通じて見えてくる新しい視点に興奮したこと、仲間と話して泣き笑いするほど楽しかったこと、仲間からの笑顔やさりげない言葉に隠された優しさに心がぼかぼかしたこと、会議の全てを思い出そうとすると、走馬灯のように様々な感情の波に襲われていた自分を思い出す。更に思い返せば、本会議前、事前活動が始まってから既に色々な感情に飲み込まれていた。春合宿の後、焦燥感と不安でいっぱいだったのが今ではなんだか懐かしい。色とりどりの感情と多くの笑い顔に、大きすぎる位の笑い声がつまったこの夏は、これから先の私に映る世界を変えるだろう。

60回の会議のテーマであった“Students Redefining Their Role through Insight and Action”学生としての役割とは何だろうか。考えてみるほど自分の未熟さと小ささから限界を感じ、一人の力がそこまで相互理解や世界情勢の問題に大きく貢献できるのかは正直懐疑的であった。しかし、会議を終えた今、一人が「変わる」ことの影響力は必

ずしも小さいわけではないのかもしれない、そう思う。参加者一人一人の変化が私や他の参加者を刺激したように、一人の変化は波及して広がっていく。変わる人数が多いほど、影響もより広く波及していくのなら、一人が与える影響は一人の限界を上回る。

人と人との化学反応は予想不可能でおもしろい。反応によって生み出されるものがどれほど大きく、輝いたものになるか、それは先入観を打ち破り、人を受け入れる個人の器の大きさに左右されるのかもしれない。アカデミックな面での触発だけでなく、温かいものを心に残してくれた皆には感謝の気持ちでいっぱいだ。それぞれの場所で、自分の道を歩き始めた皆をずっと応援している。私も、「変わる」ためのリスクを恐れず、目標に向かって着実に進んでいきたい。

### 松尾恵輔

日本は現在、対外的にはアジアでのプレゼンスを失いつつあり、「ジャパン・ナッシング」といわれる状況にある。また内側を見てみれば、財政赤字、少子高齢化、格差の拡大など問題は山積である。

そんな社会の中で日々閉塞感と漠然とした不安を感じていた私は、これまでずっと「21世紀の日本の望ましい姿」を模索していた。そしてその課題を、第60回日米学生会議では「日本人がどのような生き方をするのが幸せなのか」という課題に置き換え探してきた。日本人が「どのように生きるのが幸せなのか」の大まかな尺度を、先の10年間の不況やグローバル化により価値観が多様化する中で見失ってしまっており、その価値観を再構成することで、その価値観を達成するために必要な社会状況がどのようなものであるか、導き出せると考えたからである。

第60回日米学生会議の半年が終わってみて、まだその問いに対する明確な答えは見つからなかった。やはり価値観は個人によって異なる物だから仕方ないのだろうか。課題そのものが愚問だったのか。

だが、この課題を考える中で私は実に多くの人たちの生き方と真剣に向き合うことができた。そのなかでも、モンタナで私を迎え入れてくれたグレッグとシェリーの夫婦の生き方はとても印象的だった。

彼らはミズーラにある山の中腹にある、大きな庭と家庭菜園のあるアメリカにしては少し小さめの家に住んでいる。彼らはたまに二人で旅行に行く以外、大抵家でゆっくり過ごしているようだ。庭で取れた野菜を使って料理し、バルコニーにあるベンチでお酒を飲み、静かに語り合いながら食事をする。それは、物質的な豊かさではなく、「家族と、何気ない日常を過ごす」ことの素晴らしさを体現した生き方であった。もしかしたら、この生き方こそ今後日本人が目指していく「幸せな生き方」の定義なのではないかと感じた。

話は変わって、JASCの日々は私にとって一生忘れられないであろう瞬間の連続であった。みんなと朝まで語り合ったこと。誕生日、皆がバスの中でハッピーバースデーを合唱してくれたこと。ポートランドでダンスを踊ったこと。RTのメンバーとの何気ない冗談の言い合い。ファイナルフォーラムを目指して、毎日3時間睡眠で議論をした事。皆で夜山の上から眺めた流れ星、ミズーラの夜景、宮沢賢治、満月。夜のモンタナ大学の散歩、そして事あるごとに頭に浮かぶ名曲「Leaving on a jet plane」。

国籍を超えて信頼を築き、皆と作った一瞬一瞬が私にとって宝物である。そこから感じたことや学んだことは今の自分や未来の自分を作ってくれるという確信がある。全ての60th JASCerに伝えたい。「ありがとう。また会おう。」

#### 松本秀也

私が日米学生会議(以下JASC)を知ったのは、実は他でもないmixiだった。大学1年の終盤に差し掛かっている頃JASCの“コミュニティ”を発見し、面白そうだなと感じていた。しかし実際の活動内容などについては全く知る由もなく、大学2年の夏休みに、他のプログラムで一緒だった先輩にJASCの話聞き、それ以来本格的に興味を持つようになった。その意味で、参加が決まったとき、またアメリカに渡るまでの期待は他のプログラムに寄せられていたそれよりも大きかった。

全体を通して、やはり良い部分と悪い部分は在ったように思う。反省すべき点としては、私自身が時

に「お客様気分」に浸ってしまったという事。JASCにおいては、全てが計画され、資金援助も他の学生会議などに比べてしっかりしている。そういう意味でも、少し安心して会を実行委員やプログラムに任せてしまっていた気がしている。それは他の人にも少なからずあったことのように思う。また内容的な部分では、事前に準備していった内容をアメリカの学生と照らし合わせた際に、どうしても妥協しなければならない部分があったことは、少し消極的だったようにも思う。

しかしそれらは同時に、学ぶべきことでもあった。今回JASCの組織としての大きさや実行委員の運営力の偉大さ、参加者として傍観してしまう部分はあったにしろ、そういった部分を非常に良く見ることができた。またアメリカ側学生との議論についても、少し妥協してしまった部分があるとは言え、それらを最小限にすべく意見を言えたことはできたように感じるし、アメリカと日本の議論の仕方の違い、或いはそれを理解した上での話しの進め方といったものを考えるキッカケとなったと思う。

そして何よりも、1ヵ月でできた仲間は、一生の財産であり、私がJASCから得たものの中で最も大切なことであると感じている。1ヵ月生活を共にし、議論し、遊んだ時間は、今後の人生において何にも変えられないものであろう。また今後も、彼らとともに思い出を作り、この絆が世界において何かしらの発信をできるのではないかという期待を私は大いに抱いている。JASCは良くlife changing experienceと表現されるが、私はこの1ヵ月が私の人生を変えるとは思っていない。人生を変えていくのは、あくまで「これから」である。

#### 盛島正人

第60回日米学生会議(JASC)の日本側代表の1人選ばれて以来、事前活動、本会議を通して、現代におけるJASCの意義を考え続けてきた。戦前の戦争回避、戦後の平和構築、高度経済成長期の貿易摩擦の緩和と、JASCの意義・役割は時代の移り変わりと共に変化してきた。では、現在、日米関係が成熟した状況で、JASCに出来ることは何なのか。第

## 第5章 参加者の声

60回日米学生会議での経験を通して、それは日米両国の一般の人々の間に、「太平洋を挟んだ反対側の国にも、自分たちと同じ人間がいる」という質感を醸成することではないかと思うようになった。「海の向こう側にも、自分たちと同じように泣き、笑い、日々を過ごす人々がいる」という感覚を両国の一般市民の間に育むことこそ、平時の日米関係において求められていることであり、JASCに出来ることではないかと。しかし、こうした理解に至るまでには、多くの挫折や失望があった。

JASCの持つ可能性に胸躍らせて参加した会議だったが、開始直後は失望の連続だった。ポートランドやLAの日本領事館でのレセプションでは、JASCerが両国のDecision makersに対して、ほとんど何も提供出来ないこと(彼らは、JASCの有無に関わらず、有事などの際に必要とあらば日米関係に関して学び、良好な関係維持のために奔走するだろうし、現在はその手段も多数ある)を思い知らされ、また分科会活動やその他のアカデミックな活動では、専門知識を有さない学生が1ヵ月という限られた時間の中で達成できる学問的貢献が限定的であることを思い知らされた。このように、JASCの外の世界に全く影響を与えることのできない日々が続き、JASCの意義を見出せない状況が続いた。

こうした状況を打破するキッカケとなったのは、モンタナでのHomestayとWar & Peace Discussionだった。Homestayでは、JASCerが一般のアメリカ人と初めて触れ合い、外の世界に初めて影響を与えることが出来た。日本の領事や日本を研究対象とする学者らとは異なり、ホストファミリーたちは、JASCerとの一つ一つの会話や私たちの彼らの家での振る舞いなどから、日本人とアメリカ人の共通点や違いを学ぶことが出来た。また、War & Peace Discussionでは、現役アメリカ軍人、退役軍人、平和活動家、そして日米両国の学生が戦争と平和に関して議論することを通して、それまでの人生、考え方、所属組織、そして国籍が異なる中でも、合意点を目指して建設的な議論ができるということを証明した。自分の目の前でモンタナの素晴らしさを語るホストマザーや戦争の悲惨さを訴える現役アメリ

カ軍人が段々と人間になっていき、私たちが彼女や彼にとって人間になっていった。JASCが媒体となって、立場の違いや国境を越えて、両国の一般の人々の間に、「彼らも自分たちと同じ人間なんだ」という質感が醸成されていった。

フルブライト奨学金の創設者、故J・ウィリアム・フルブライト上院議員はかつて、“教育交流は、「国家を人々に変える」と言い、人間的な国際関係、すなわち“他の国々に自分たちの国で育った人々と同じように喜びや悲しみ、残酷さや優しさを共感できる人々が住んでいる、ということが実感”できるような関係の構築に尽力した。そのような関係こそ、悲惨な戦争を防ぐ有効な手立てになると信じて。戦争のない平和な時代、JASCに出来ることは、日米両国の人々の間に「太平洋の向こう側にも自分たちと同じ人間がいる」という質感を醸成し、日米関係を人間的に変えていくこと、日本とアメリカを日本人とアメリカ人に変えていくことではないだろうか。モンタナで手にした質感がこれからのJASCで、よりはっきり、ずっしりと重たいものになっていくことを心から願う。

### 安川瑛美

私にとってJASCの夏は、新たな発見と再確認で満ちた一生に一度の時だった。何か大きな変化が私に起こったのかといえば、正直そうではないかもしれないけれど、変化はこれから起きるような予感がある。

始まりは終わりへのカウントダウン。会議の始まりから終わりは、あっという間に過ぎ去った。毎日1分1秒でも惜しんで、みんなと過ごそうと心に決めた。眠くて、疲れていて、目を閉じたい時も、もう少しみんなと話していよう。だって、もっともっとみんなを知りたいから。

You can make more friends in two months by becoming interested in other people than you can in two years by trying to get other people interested in you.

-- Dale Carnegie

— Portland: the place where we started —

緊張の初対面から、はじめて受け取るJASC mail、buddyからの歓迎の言葉に興奮を隠せない。大使館でのopening ceremony、会議は始まった。はじめてのRT時間から、移民フォーラムでのディスカッション、アカデミックな準備はそこまで楽じゃないけれど議論するのは楽しい。ポートランドの街へ繰り出したscavenger huntで、「指令」に従って大通りで歌う、走る、躍る。負けず嫌いが集まったチームは、町を走る、走る。ポートランドで私たちは出会い、走りだした。

— LA: the place where we grew —

所属のマイノリティと多文化社会RTは、マイノリティ・フォーラムでのアフターマティブ・アクションのプレゼンテーションの準備に、滞在中半分明け暮れた。UCLAの寮で、移動バスの中で、ビーチで、カフェでみんなと語り合う。夢、趣味、恋などを話し始めたら、止まらない。これだからみんな、寝不足なんだ！ Hollywoodから帰るときに道に迷ってとった“we are lost” picture、今ではいい思い出。ビーチでの日焼けをアロエで癒しながら、LAの太陽は私たちの心に熱い友情を芽生えさせ、団結をより強くした。

— Missoula: the place where we were bonded tight —

ホストファミリーとの時間は、モンタナを特別な場所に。Horseback riding, s'moresなどアメリカらしい経験をプレゼントしてくれたお礼に、手巻き寿司をふるまい日本の食を楽しんでもらった。環境フォーラム、自転車づくり、地元の方々との接点を通じて、私たちは何かしら発信できたのだろうか。モンタナでの緩やかな時間の中、流星群が流れる星空の下で過ごした時間の「意味」は更新されていく。

— Boston: the place where we finished and departed for the future —

終わりのことは考えないように、楽しもう。ハーバード大学でのファイナルフォーラム、7分に詰め込む1ヵ月の成果。最後の夜のJASC mail、みんなへ綴る思いの数々はあふれる涙と、温かいハグでいっぱいだ。「また会おうね」の言葉で、終えよう。

In the hope to meet

Shortly again, and make our absence sweet.

-- Ben Jonson

私たちはまだ始まったばかり、

JASCでの価値の真価を問われるのは、これから。

### 油井英孝

初めてJASCのメンバーと会ったとき、本当に仲良くなれるのだろうか／自分が変化できるのだろうかという心配があった。しかし、今はこの友情は一生続いていくだろうし、自分も強くなった、と確信をもって言える。JASCでの経験は、それほど自分にとって衝撃的なものであった。なぜだろうか？ 自分は二つの大きな理由を考えた。

一つ目は、一人一人、個人が活躍出来るチャンスがあること。3週間という時間は非常に短い、自分が勇気を出せば、どの日常の一コマも自分が輝けるものになっていく。全体ミーティングで発言すること、パネリストに質問をすること、喋ったことのない人に話しかけてみる、プログラムにない企画を作ってみること。これらは、全て自分の「勇気」によって作り出せるものであり、自分の一生を変えようような出来事になるかもしれないのだ。

二つ目は、個人の活躍を讃えあえる文化があること。たとえ、活躍できるチャンスで失敗したとしても、仲間が失敗を受容してくれ、的確なアドバイスをくれ、積極的な行為に対して賛美の言葉をくれるのである。このような明るい雰囲気、自分の成功体験を作り出せてくれて、他人から積極的に学ぼうというムードを作り出し、個人として仲間を尊敬できる所へと繋がっていくのだ。

自分にとっての、アメリカでの約3週間は、自分を鍛え、他人を思いやるという日々の小さな目標をこなすだけで精一杯に終わったが、振り返ってみたら、一つ一つの行動が自分を成長させるチャンスであったと思う。そして、自分は毎日、毎日のチャンスを逃さず活かしていたと自信を持って言えることを改めて誇りに思っている。

アメリカに行く前は、世界は狭く、自分は、将来は若い頃に貯蓄していた知識のみで生きていけるだろうという安易な思いで生きていた。しかし、アメ

## 第5章 参加者の声

リカに1ヵ月いて、世界は広く、世の中には面白い学問・友人・世界があって、一つ一つが輝いているということを改めて感じた。JASCでの別れは、とても辛いものがあった。

皆、別々の道を歩んできて、一度JASCに集まって、またそれぞれの道を歩んでいく。今まで、1ヵ月間共に、笑い・泣き・一生懸命に過ごした分だけ、寂しさは募るが、別々の道を心から応援してあげたいと思っている。そして、自分も彼ら彼女らの頑張りに負けないよう、精一杯頑張っていきたいと思っている。

JASCはいわば「駅」であると思っている。JASCという「駅」に集まり、そこを通過点として、お互いの電車を確認しながら、自分の道を切り開いていく。この素敵な出来事に出会えたことを心から感謝している。

### 横山雄一

日米学生会議。そんな会議の存在をふと思い出したのは、1次選考の締め切りも差し迫った2月下旬のことだった。

私がこの会議の存在を知ったのは、中高時代の先輩に大学1、2年の間にどんなことに取り組んだらいいか尋ねた、2007年の夏のこと。応募時期がまだまだ先だと聞いた私はすっかり安心しきってしまっていた。1次選考直前になって初めて2次選考の日程を知ったため選考の時期には海外旅行の予定まで入っていた。フライトのスケジュールを変え、選考の為の準備を旅行の準備と並行して進め…といった調子で2次選考は慌しく終了した。絶対に落ちたと思って失意の内に旅行に向かった私を日本で待っていたのは、どうしたことが、合格の連絡だった。

こうして運良く日米学生会議に参加できることになった私がまず行ったことは、イメージを持つことだった。イメージを先に作っておくことで、自分の体験を振り返るのが容易になる。最も著名な「先輩」のひとり、故宮澤喜一氏の参加した時期の日米学生会議を描いた『友情力あり』（城山三郎著、講談社）にこんな一文を見つけた。「真の友情だけは海を隔て年を経ても、変わることがない。」こうして私の中に

は友情を培う場としての会議、というイメージが生まれた。今考えてみると、それからの私にとっての日米学生会議とは、一つにはこのイメージを確かめていく軌跡であったような気もする。

3ヵ月の事前活動、1ヵ月の本会議の中で、友情が(そして時には愛情が)固まっていった。分科会の方向性を悩みながら、レストランで食事しながら、休憩中に、1日のプログラムを終えた後に、ホテルのロビーで、バスでの移動中に、ディスカッションをしながら、食事しながら、買い物しながら、ジムで運動しながら、自転車を組み立てながら、スーツを着て真剣に講演を聞きながら、草の上に寝転がりながら、野球しながら、私たちはJASCerとして同じ時を共有した。参加者全員と納得行くまで話ができ、という訳ではない。それでも、皆と本当に楽しく過ごすことができた。

最も力を入れて取り組んだ分科会活動では、分科会の目標がなかなか定まらず、皆で本会議まで苦しみ続けた。分科会合宿を行っても目標は定まらなかった。多くの方々を訪問してお話を伺った。インターネットを通じて何度も連絡を取り合った。自分がディスカッションのファシリテーターをする為の準備にも、相当骨を折った。しかし、そうした苦しみの一つ一つでさえ、本当に楽しかった。目標を上手く設定できず苦しむ中でも下らないことで皆笑いあった。お互いに色々からかいあうこともあったが、それも信頼あってこそのことだ。

ここまでは主に満足感を持って語れることを述べてきたが、一方で悔いが残っていることもある。まずは、英語だ。皆が一生懸命伝えてくれることが分からないことが数え切れないほどあった。ジョークが理解できず、周りが笑っている中で笑えないという状況の中で何度悔しい思いをしただろう。言いたいことを正確に伝えられずに歯軋りをするのは毎日のことだった。アメリカ滞在中に日本に送った葉書のほとんどに私は「英語で苦勞している」と書いた気がする。だがそれでも、困ったときにはいつも誰かが手を差し伸べてくれた。皆の通訳、ノート、説明に、何度も助けられた。

もう一つ悔いが残るのは、積極的になりきれな

かったかな、ということだ。皆のエネルギーには圧倒されることが非常に多かった。私は不器用で小心なところもあるせい(…というと一部の人には疑われそうだが)、どこか自分を出し切れなかった部分があった。

楽しく、少し悔いの残る、それでも充実した旅は、もう終わってしまった。しかし、私は確信している。「真の友情だけは海を隔て年を経ても、変わらない。」一度は参加できないのではないかと思った日米学生会議。幸運を噛み締めながら、ここで得た友情を大切にこれからの人生を過ごしていきたい。

#### 李 凌韻

二回目のJASC、二回目の1ヵ月間。何かが待ち受けているのだろうというワクワク感は変わらないが、緊張感と責任感、そして若干の疲労感が去年より加わった。実行委員とはいかなるものか、いかなる役割を負って、いかなる態度で行うものなのか。その答えは実行委員の数だけあるのだろう。私が自分に課したのは、参加者をサポートすること、常に注意力を絶やさずに突発時に対応できること、そしてなおかつ参加者の輪に溶け込むことであった。1ヵ月終わって見た現在、それが全て達成されたとは言いがたい。次々と起こる不測事態にたじろぎ、困惑したこともあったし、葛藤し苦しむ参加者に、どんな言葉をかけていいかわからずに立ち去ることもあった。そして、参加者の発言に既視感を感じてしまっ、一歩引いて観察していたことも多々あったと思う。

それを反省した上で考えてみても、1ヵ月間終わって鮮明に覚えていることは、助けてくれた仲間のこと、会議中で味わった達成感、そしてみんなからももらった無数の小さな幸せである。挫折感と壁、JASCにおいて誰もが感じたことだろうし、誰にも感じてほしいことである。でもそれが、JASCではない。

JASCの終わりが始まりである。会議中何度も繰り返された言葉だ。それは実行委員8人が、頭をつき合わせて考えた理念でもある。JASCで見つけた

幸せや喜びを自信に変え、世界への信頼に変え、この先に突き進んで行ってほしい。世界を変えたい、自己実現をもってよりよい影響を。若者ならば一度は思うことである。それが諦められ、色あせてゆくのは、やはり先が見えないから、レスポンスが返ってこないから、そして一人で世界に立ち向かう孤独感である。JASCは、そんな夢をかすめとるひとつひとつの小さな出来事を、さらにかすめとる場ではないかと思う。

そしてそんな自分の夢、自分の目標の成長の傍で、国際交流というテーマが、私の人生に加わるのは確かであろう。

#### 渡辺恭子

日米学生会議との出会いは、大学の情報提供スペースに置かれた青いリーフレットを通してだった。委員長の威厳溢れる顔と、それとは対照的な楽しそうな写真の数々が一緒に並んでいる事をちょっと面白く思ったことを覚えている。会議の名前を聞いたこともない私が応募しようと決めた理由は、分科会の内容に強く惹かれたからだった。山積する社会問題を真剣に考え、自分達なりの答えを模索する人たちが集まる場だと思った。そして、その考えは今でも変わっていない。

会議を二度経験して思うに、日米学生会議は自分と向き合い、そして社会と向き合う機会を提供してくれている場でもあるということだ。二度目の夏、会議中ずっと頭を駆け巡っていた言葉がある。"Do what you can do, don't ask for what you can't do". 59回の時参加した分科会のリーダーからももらった言葉だ。思えば、私は自分に自信が持たなくていつもあれこれ悩み立ち止まっていた。「悩む暇があれば、動いてから悩め」。そうやって私の背中を押してくれた。今でも、私に出来ない事はたくさんある。でも出来ない事を悲観的に考えて立ち止まるよりも、今の自分に出来る事を探して動いていくほうが精神衛生上もいい生産的だ。今出来ないことはなぜ出来ないのか、どうやったら出来るようになるのか、そう考えて行動していくことの大切さをこの言葉を起点とし会議を通して学んだ。各サイトで組まれて

## 第5章 参加者の声

いた様々なディスカッションの機会を通して、山積する社会問題とその解決の複雑さを知った。ロサンゼルスと比較政治フォーラムでは、アメリカのgun controlについて考え、アメリカ社会の根底に流れる個人主義がもたらした現代の問題を垣間見た。モンタナの環境フォーラムでは、現地の活動家を交え電子廃棄物や水銀の問題について意見交換をすることができ、遠く離れたアメリカでも世界的な問題について取り組んでいる人たちが確かにいることを実感でき励まされた。こうした社会問題と向き合う機会が充実していると共に、ディスカッションを自分のものとするための工夫や取り組みが日米学生会議ではなされていることは特筆すべきだろう。“C”をして論点や要点を言ってもらう他、“T”をして通訳するなど伝統あるサインが今でも残っている。そして、何より話しがうまく通じなくても諦めずに理解しようと話を聞いてくれる人々の存在は何よりありがたかった。相手の言っていることに耳を傾け、自分も相手に伝わるように話をする姿勢。会議が始まった理由でもある相互理解を重んじる伝統が生んだ土壌によって、私達は相手を慮る姿勢とともに、いい事も悪い事も含め忌憚なく意見を言い合いお互いの友情を深めていった。

日米学生会議の出会いから今に至るまで、本当に様々なことがあった。感想文を書くこととなった今、次々と色々な思い出が浮かんで消えていく。一つ一つの経験が波紋を作り影響しあって今の私をつくっている。初めて日米学生会議に参加した直後は、“Life changing experience”という言葉の意味が実感できなかった。しかし今言えることは、日米学生会議は私の生き方を変えてくれたということだ。日米学生会議との出会いをもたらししてくれた、青いリーフレットは想像を超える世界に私を引張ってくれた。そうして迎え入れてくれた全ての人に感謝を言いたい。月1回の合宿、広報活動、選考、各種イベントの実施など実行委員8人の力を結束させないととてもじゃないがまわしきれなかった。そして何より、周りからの支援が私達を勇気付けてくれた。主催団体である国際教育振興会の方々を始め、OB・OGの方々、第59回実行委員・参加者のみんな。

第60回参加者のみんな。日米学生会議に関わって下さった全ての方々。たくさんのご支援と愛情を受けて第60回は無事に終わる事ができました、この場を借りて言わせて下さい。ありがとうございました。

### 渡辺千尋

初めてJASCのことを知ったのは今年の初めに学校でポスターを見たとき。見た瞬間に「学生最後の夏休み、これに参加してみよう。」という意欲がわいた。直感的に最高の夏休みになる気がした。この直感はずっと間違っていなかった。JASCはただ単に「楽しい」だけじゃない。その楽しさは以下に記すとおり。(無理やりJASCの頭文字を使って表すと)

- J 日本人として、
- A アメリカに渡り、
- S 学生として、
- C 会議に参加することだと思う。

日本人として

私は生まれてから日本にいなかったことは総計しても2ヵ月ぐらいであろう。日本の義務教育をまじめに受けて、書道・剣道の段をもっていて、日本文学と和食が大好きな私。分科会が「悲劇の記憶」だったので会議前に日本史も復習したし。私は柳田國男には到底かなわないけど、日本のことはきちんと説明できると思っていた。でも実際、今回アメリカに行き、いろいろな方々に、広範囲にわたって、日本についてたくさん質問(マンガ・食べ物・教育・歴史問題などなど)を受けた。私の日本に対する認識はまだまだまだ足りないと感じた。もっと日本人として自国、日本を知らなくてはならない。

### 1. アメリカ

初めてのアメリカ。何もかもが新鮮に感じられた。ポートランド・LA・ミズーラ・ボストン。四つの異なるアメリカを一度に見られる機会はそうないと思う。アメデリと一緒にだったこともあり私たち日本人だけでは見えてこないアメリカの側面を見られたと確信している。アメリカは何もかも大きく豪快で大雑把だった。アメリカの大学の寮や学食は私に



としてはとても新鮮だった。各地で訪れたミュージアムや企業への訪問も驚きの連続だった。(日本とアメリカを相対化してもっと日本が好きになった。)

## 2. 学生として

学生として。これはJASCの最も大切にしている、しなければならない点だと思う。私は「学生として」日米交流活動に参加する意義を考えていた。それは「一人の学生として、自分の考えをもつこと」だという結論に達した。JASCの良いところは学生だからこそ素直に疑問や意見を言えるということだ。たとえ相手がアメリカ海軍の将校、ハーバードの教授、偉い弁護士の先生でも、思ったことを質問・発言できる。これは学生の特権である。そうすることによって私たち学生は本当に知りたかったことを知ることができる。その結果、より興味関心を持ち、次の行動に移すというように、良い循環になる。こうして良い学生会議が受け継がれていくのだ。

## 3. 会議に参加して

会議に参加して、私はたくさんの刺激を受けた。刺激を受けすぎて、逆に今でも何がなんだかわからなくなかったりするので私は個人的に時間をかけて消化していくつもりだ。アメリカで個人的には絶対に入れないような施設を訪問し、個人的には絶対にお話できないような方々と談話した。この経験から学んだことは実に貴重である。

しかし…しかし…。一番刺激が強かったのはやっぱりJASCerだと思う。私はこのメンバーを客観的に見て「すごいなあ」と幾度となく感嘆した。お世辞抜きでみんな才能豊かで、努力を惜しまない人たちばかりだった。言ってしまうと「所詮」学生会議。手を抜こうと思えば抜ける。でもそんなことをする人は一人もいない。全員が全力で取り組む姿は本当に美しい。こういった人たちと一緒に生活することは、お互い知らず知らずのうちにいい影響波を出しあっている。私は何度もビッグウェーブにのまれた。この会議で出会いは…千載一遇かつ一期一会。

このようにJASCの「楽しさ」は学生として今しかできない体験・経験ができること。同時に、将来に向けての課題も見つけられるということ。世界、特に日本とアメリカに向き合うことで究極的には自分

に向き合わなくてはならないということ。この三点が参加して最も痛感したことだ。もちろん、楽しくない瞬間も多々あった。英語で内容の理解できない講演、未知の分野のプレゼンテーション。眠気と戦いながらのRT。でも、こうした事も、私にとってはJASCの「楽しさ」に含まれる。

私は今回、この会議に参加できたことを誇りに思う。これほどの大きな会議を運営してくれたECの皆、本会議を支えてくださっているすべての方々にお礼を言いたいです。ありがとうございました。

会議が終わって早1ヵ月。私は長い夏休みを終え、いつもと変わらない学生生活を送っている…はずだった。でも、今までの夏休み明けとは少し違う。世間で騒がれているNEWSの理解度と関心度が増し、大学には留学生としてアメデリがいて、JASCメーリスは相変わらず頻繁に回ってきて、本屋さんに行けば戦争関係の本が目飛び込んでくる。極めつけはフランス人のフランス語がわからなくて無意識にTを使いそうになった…。今でも確実に私の中にJASC魂が根付いている。私はこれからもこのJASC魂を大切にしたい。みんながそうしているように。終わり。

## 渡邊ともね

「自分自身と向き合う・自分の価値観にふれる」1ヵ月だったという表現が、私の率直な感想である。その中で感じたことを「3つの50%」と「一つの100%」というキーワードを使って、述べたいと思う。

一つ目の50パーセント。それは、「自分が自分自身を知っていたパーセンテージ」である。日米学生会議(以下JASCとする)の活動を通して、自分とは、何を大切に思い、何を重要視して生きているのかなど、自分自身の価値観と向き合う時間が多々あった。その中で、「自分とはこういう人間だったのだ」等、普段見過ごしていた自分自身に気づかされ、同時に知っていたようではっきり認識していなかった自分に気付かされた。

二つ目の50パーセント。それは、「私たちに見えるもの」である。JASCの活動を通して、たくさんのひとに出会うことができた。その中で感じたこと

## 第5章 参加者の声

である。私たちが何かを判断するとき、真実(または本質)は、私たちの目に映っているものの半分(またはそれ以下)でしかないということである。「目に映らないものをどれだけ大切にできるか」「目立たないものに配慮する心があるか」など、人の本質は私たちが見逃してしまいそうな行動やしぐさのなかに現れていると感じた。目に見えないものには、私たちが見逃してしまいそうで価値有るものがたくさんある。そして私も、「目に見えないもの」を大切にできるひとになりたいと心から願う。

三つ目の50パーセント。それは、「与えられた機会」である。私たちは同じ時間を与えられたとしても、その経験の一連を100パーセントとして捉えたとしたら、「与えられた機会」自体はそのうちの50パーセントであると思う。残りの50パーセントは個人個人に委ねられており、それを充実したものにするか否かは私たちそれぞれの手に委ねられている。与えられた同じ時間が有るとして、それを活かすも活かさ

ないも、全てそれは私たちの責任である。JASCという場で私がどの程度、自分に委ねられた50パーセントを上手に使うことができたか、(またはこれからできるか)それを自分に問い直す。私は、この機会を得るために私を支えてくれたひとたちに感謝しつつ、責任を感じながら歩みたい。

最後に、私が感じた100パーセントを述べて、私の第60回日米学生会議の感想としたい。私たちは日常の中で、興味のあることや、やってみたいと思うことにたくさん出会う。しかし、その思いが中途半端では、なかなか実現できない。何かを成し遂げたいと感じたときに、そのことに私たちがかけるべき思いは、ほぼ「100パーセント」である。「強い思いや願い」こそが、変化や達成の源である。JASCに参加した学生たちから、私が受けた最大の刺激は彼らの「思い」や「願い」であった。この仲間に出会えたことを、心の底から、幸せに思う。